

## 第2章 宗像市の維持向上すべき歴史的風致

北部九州に位置する本市には、玄界灘を介して中国大陸や朝鮮半島に近く、また国内の主要地を結ぶルート上に位置することから、古来より海や陸の道を通じて活発な交流を行ってきた歴史がある。

海の道を介した交流をみると、古くは縄文時代以降の出土遺物などに朝鮮半島や九州、日本海沿岸地域との直接的な関連性がみられる。古墳時代から古代にかけては、宗像地域を治めた宗像氏や宗像大社が成立し、ヤマト王権とのつながりの下、沖ノ島における国家的祭祀を司るとともに大陸と日本を結ぶ大きな役割を果たした。中世には、宗像大社が中心となって宋（中国）と貿易を行い、宗像大社の祭事も盛んとなった。近世になると、浦々での漁業が盛んになるとともに豊漁や海での安全を願い恵比寿神への深い信仰へとつながっていった。

一方、陸の道を介した交流をみると、古代には大宰府と近畿を結ぶ官道が通り、江戸時代には現在の福岡県北九州市と佐賀県唐津市を結ぶ唐津街道が整備され、赤間宿が市内随一の賑わいを見せた。明治時代以降は鉄道が敷設され、農村から交通至便の住宅都市として発展するなど近代化の歩みを進めていった。

このような歴史的環境のなか、神湊地区・鐘崎地区など沿岸部や離島にみる浦々、山里に位置する赤間地区・吉武地区には、交流の歴史を背景に互いに影響しあいながら形成され発達していったまちなみや集落が良好に残されている。また、これらの地域には宗像大社の社殿をはじめとする地域の歴史を反映した建造物が存在し、その周辺では、今日でも各地域の歴史や伝統を反映した活動が続けられており、建物と一体となって歴史や伝統を感じることでできる良好な歴史的風致が受け継がれている。



大島地区のまちなみ



吉武地区のまちなみ



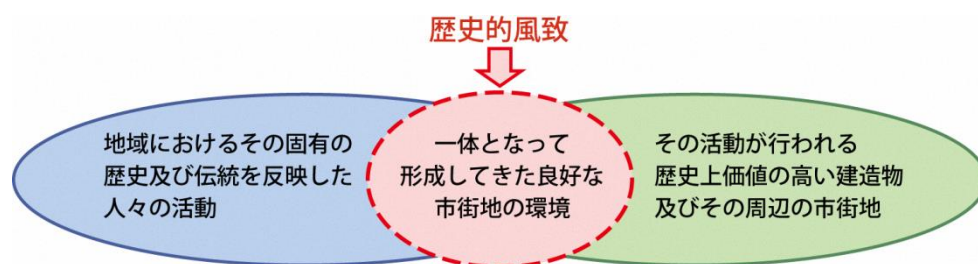
みあれ祭後の神湊



八所宮御神幸祭前の吉武地区

「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法第 1 条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われている歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が、一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。そのため、下記の①～③の条件をすべて備えていることが、歴史的風致の前提条件といえる。

- ① : 地域に固有の歴史や伝統を反映した活動が行われていること
- ② : ①の活動が、歴史上価値の高い建造物とその周辺で行われていること
- ③ : ①の活動と②の建造物が、一体となって良好な市街地環境を形成していること



歴史まちづくり法に基づく上記の条件を考慮し、宗像市の維持向上すべき歴史的風致として次の 4 つを選定した。

### 1. 宗像大社ゆかりの歴史的風致

宗像大社は沖ノ島に位置する沖津宮と大島に位置する中津宮、九州本土に位置する辺津宮の三宮の総称で、全国で約 6,400 社ある宗像三女神を祀る神社の総本社であり、すべての道の守護神として全国的に広く信仰を集めている神社である。

現在、宗像大社では年間約 40 もの祭事が行われ、特に宗像大社辺津宮で 10 月 1 日から 10 月 3 日にかけて行われる秋季大祭と 12 月の古式祭こしきさい、大島の中津宮で 8 月 7 日に行われる七夕祭りは、氏子や崇敬者たちに支えられながら千数百年間続けられてきたものである。また、浦々の日々の暮らしに根付いている宗像三女神信仰には、宗像大社の神様に対する感謝と畏敬の念がよく表れている。

### 2. 宗像の浦々にみる歴史的風致

本市の北側玄界灘沿岸部に位置する鐘崎地区と神湊地区、離島の大島、地島では現在も多くの人々が漁業を生業としている。これらの海と共に暮らす人々の信仰や祭事には常に死や危険と隣り合わせであることから、海からの恵みに対する感謝と自然や万物に対する畏敬の念が込められており、日々の暮らしの中で豊漁と航海安全を祈り、感謝を捧げる様々な神様がいて、今もその信仰や風習が息づいている。

### 3. 八所宮の御神幸祭にみる歴史的風致

市南東部の最も内陸の場所に位置する八所神社は、地元で八所宮と呼ばれ、地域の神社として親しまれ崇敬されてきた。毎年 10 月には、神様と地域の人々が一体となって里の恵みに感謝し五穀豊穰を祈る御神幸祭が行われている。また、その周辺には田園風景と農村集落が広がっており、江戸時代には、赤間宿と木屋瀬宿とを結ぶ赤間街道が通っていたため、旧街道沿いには現在も近世の町屋が立ち並ぶ風景をみることができる。

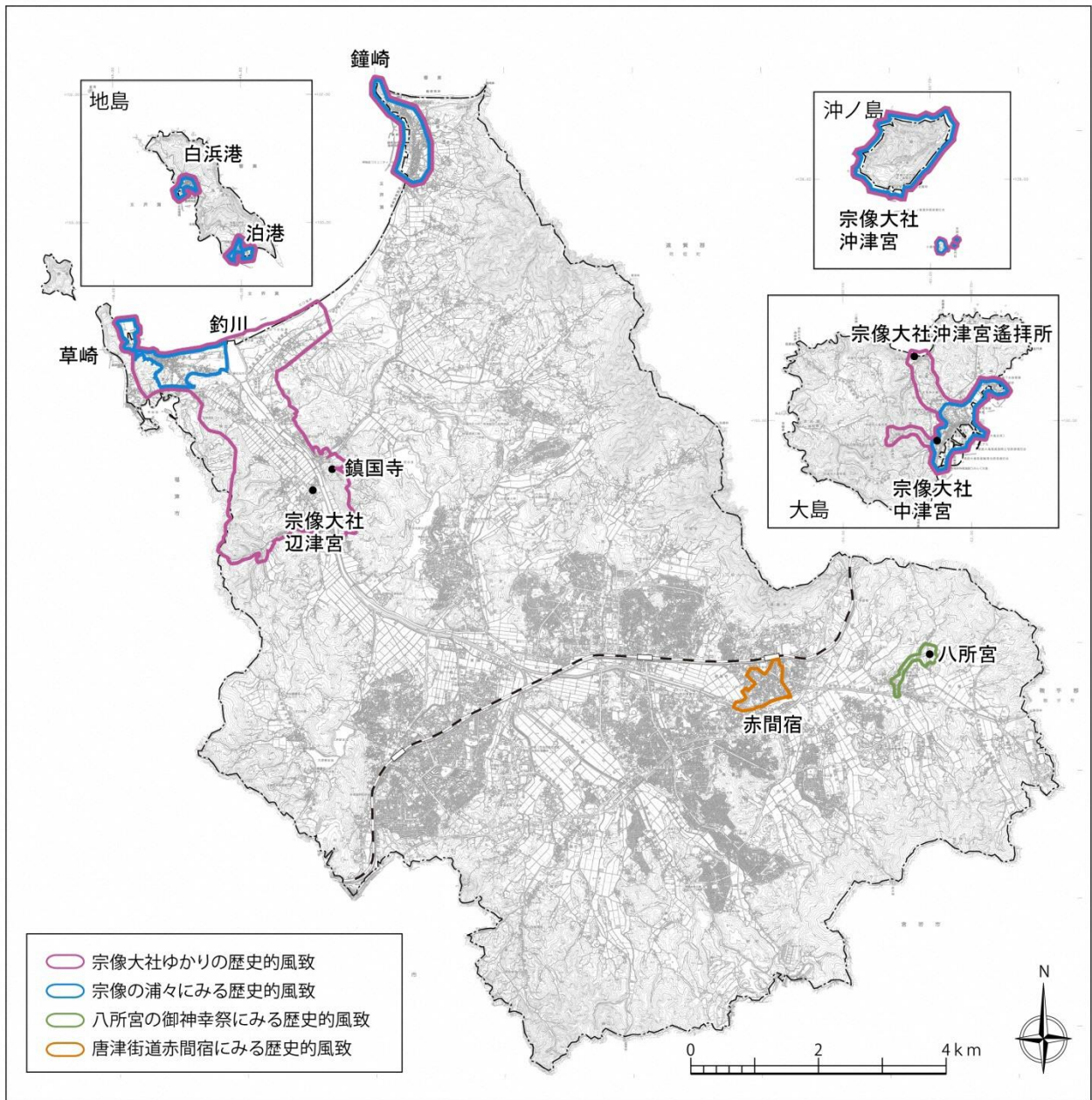
### 4. 唐津街道赤間宿にみる歴史的風致

江戸時代、唐津街道は筑前小倉（北九州市）から肥前唐津（佐賀県唐津市）を結ぶ北部九州の交通と物流の大動脈として整備された。

市の東部に位置する赤間地区には唐津街道の宿場町として赤間宿が整備され、人や物資の集積地として大きく賑わった。現在も赤間宿の唐津街道沿いには、ウナギの寝床と言われる街道に面する間口が狭く、奥に長い町屋の区画が残され、古い建物が立ち並んでいる。また、宿場町として栄えた時代から続けられてきた酒造をはじめとする生業や賑やかだった時代から守り伝えられてきた人々の伝統行事が受け継がれている。

なお、これらの維持向上すべき歴史的風致についてこれから記載する事項は、現地調査及び各祭事調査報告書や論考等に基づくものである。

図 宗像市の維持向上すべき歴史的風致



## 1. 宗像大社ゆかりの歴史的風致

### (1) はじめに

宗像大社辺津宮は、中世以降「海浜」と書いて「へつみや」と呼ばれていた。これは、お宮の近くまで入海であったことを示しており、海と大陸を繋ぐ生活の拠点になっていたと推測される。現在、入海は田畑に姿を変えているが、お宮の背後の里山やその麓にある集落は昔から変わらず、今もなお良好な景観を保っており、これまで地域が大切に育んできたものである。宗像大社で行われている年間約40もの祭事は、先人が残してきた形と融合しつつ、現代まで続いており、地域の誇りとなっている。これらの祭事は神社古来のものや氏子や崇敬者にゆかりのあるものである。宗像大社の祭事については、重要文化財宗像神社文書をはじめとする豊富な史料に鎌倉時代以降の詳細な記録がみられ、祭事の内容を知ることができる。中世の宗像大社は宗像大宮司家のもとで神社が最も繁栄した時代で、年間を通じ数多くの祭事が行われていた。『正平二十三年宗像宮年中行事』(1368)によると本社・末社を合わせて年間5,921回もの祭事が行われていた。特に、宗像大社辺津宮で10月1日から10月3日にかけて行われる秋季大祭と12月の古式祭、大島の中津宮で8月7日行われる七夕祭は、氏子や崇敬者に支えられ今日まで受け継がれてきたものである。また、浦々の日々の暮らしに根付いている宗像三女神信仰には、神様に対する感謝と畏敬の念がよく表れている。

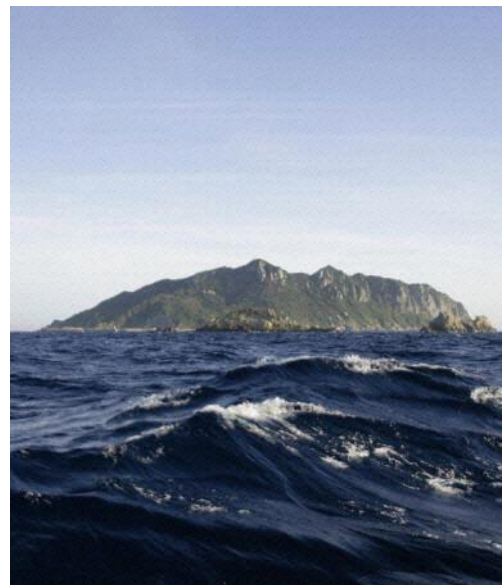
### (2) 宗像大社について

宗像大社は九州本土から約60km離れた沖ノ島に位置する沖津宮と九州本土から約11km離れた大島に位置する中津宮、九州本土に位置する辺津宮の三宮の総称で、全国で約6,400社ある宗像三女神を祀る神社の総本社である。

三宮には宗像三女神がそれぞれ鎮座しており、沖津宮には田心姫神<sup>たごりひめのかみ</sup>、中津宮には湍津姫神<sup>たぎつひめのかみ</sup>、辺津宮には市杵島姫神<sup>いちきしまひめのかみ</sup>が祀られている。このほか、大島に位置する沖津宮遙拝所を含め境内地すべてが宗像神社境内として昭和46年(1971)に国の史跡に指定されている。

『古事記』『日本書紀』には宗像三女神の誕生を伝える神話が載せられており、宗像三女神は「海北道中<sup>かいほくどうちゆう</sup>」に鎮座する「道主貴<sup>みちぬしのむち</sup>」、つまり宗像地域から朝鮮半島へ向かう海域を守る神とされる。これを裏付けるように沖ノ島では、航海の安全を願って4世紀後半から9世紀にかけて、約500年間国家的祭祀が続けられた祭祀遺跡がみつかっており、大島の中津宮周辺や九州本土の辺津宮周辺でも7世紀後半以降の祭祀の痕跡が確認されている。さらに日本書紀によると、宗像三女神は天照大神<sup>あまてらすおおみかみ</sup>から「歴代天皇のまつりごとを助け、丁重な祭祀を受けられなさい」と命令を受け、国家を守護し、国家による祭祀を受けるべき神として位置づけられてきた。

宗像大社は今日、航海安全だけでなく、すべての道の守護神として全国的に広く信仰を集めている神社である。



沖ノ島

### (3) 信仰のかたち

宗像大社三宮のひとつ沖津宮の位置する沖ノ島とその周辺の海域は好漁場で、島は豊漁をもたらしてくれる存在であると共に、漁民の命や生活を守る「神宿る島」として信仰を集めてきた。大島地区の漁師たちは、沖ノ島のことを「宝の島」、鐘崎地区の漁師たちは「沖ノ島でメシを食わせてもらっているようなもの」という。沖ノ島周辺で漁を行う漁師たちは、必ずその日獲れた一番よい魚を献魚する。特に3月から7月は沖ノ島周辺で漁をする漁師も多く「沖ノ島仲間」と呼ばれている。また、献魚の慣習は、沖ノ島の沖津宮だけではなく、大島の中津宮や九州本土の辺津宮でもある。中津宮では、豊漁に感謝し、漁で獲れた魚を1日と15日に献魚する。また、辺津宮では旅館から献魚されることもある。

漁師たちの間には沖ノ島を守るため、古くから厳格に守られてきた掟(禁忌)がある。漁師たちは不要に沖ノ島へ上陸しない。沖ノ島周辺で泊まり込みの漁を行い、沖ノ島の港に立ち寄り休息する場合も、漁師たちが船から降りることはほとんど

ない。やむを得ず沖ノ島へ上陸するときは、手前にある岩礁の小屋島と御門柱・天狗岩を鳥居に見立て、その間を通る慣例がある。その時に拍手をうったり、海に神酒を注いだりする。これは、御神体である沖ノ島の前面に位置する2つの天然岩礁を神門に見立てた行為で、江戸時代中期の『筑前国続風土記』には、これらの岩礁が「本社の御方」を向いた「鳥居」「神門」に見立てられたことに由来するものであると書かれている。また、島へ上陸するときは全裸で禊を行い、体を清めてから上陸する。島内では陸地での用便、ツバを吐くこと、島の木を伐ること、島のものを持ち出すことが一切禁止されてきた。これは、すべて御神体である沖ノ島への畏敬の念の現れである。

特に、沖ノ島と関わりの深い大島では、漁師らが、「沖ノ島は大島の漁師が守ってきた」と口にする。沖ノ島は普段渡島することができないため、女性や子ども、高齢者は大島の沖津宮遙拝所へ行き沖ノ島を遙拝している。さらに祝い事があった時や親戚が島を訪れた時、遙拝所へ行って沖ノ島を遙拝し、中津宮にもお参りし神様へ報告や感謝の気持ちを伝えたり、島の子どもが小学校に入学すると皆で中津宮にお参りしたりしている。老若男女問わず多くの人々が沖ノ島や宗像三女神を信仰している。

また、漁師たちは漁に向かう際、漁の安全を願い中津宮の前を通るときに船上から拝んだり、新しく船を造船したときの最初の漁に出る際、中津宮に向かって挨拶を行い、海上で鳥居に向かって左に3回。さらに、9月の波の穏やかな日に、みあれ祭に向け沖津宮神迎え神事として御座船で宗像大社の神職と共に沖津宮の田心姫神を大島の中津宮に迎えるとともに、みあれ祭の日は漁を行わない。これらは、海の恵みを与え、命を守ってくれる宗像の神様への感謝と信仰の現れである。みあれ祭に参加した船には、宗像大社の御札が授与され船内に大切に祀られており、漁師たちは翌年のみあれ祭までの1年生



遙拝所拜殿から沖ノ島方向をみた様子



中津宮での神迎え神事

まれ変わった神と共に新たな気持ちで漁を行う。宗像の浦々の船には宗像大社の御札が必ず祀られていて、漁業と宗像大社の信頼関係がよく分かる情景が見られる。

#### (4) 宗像大社ゆかりの歴史的風致に関連する建造物

##### ア 宗像大社沖津宮

沖ノ島は島全体が御神体で、タブノキを主体とする鬱蒼とした照葉樹林は「沖の島原始林」として国の天然記念物に指定されている。また、社殿は高さ 10m を超える巨岩群の一角にあり、巨岩に左右を挟まれた状態で立地し、本殿と拝殿・幣殿・神饌所の機能をもつ建物を構成され、切妻造妻入、銅板葺で、梁間 3 間・桁行 5 間の縦長平面で前 3 間を拝殿、奥 2 間を幣殿とし、左側に切妻造、1 間四方の神饌準備所が張り出している。本殿には宗像三女神のうち田心姫神が祀られている。江戸時代の社殿の様子は、第 4 代福岡藩主黒田綱政が描いた「沖ノ島図」(17 世紀後半～18 世紀前半) にみることができる。



宗像大社沖津宮の社殿

現在の社殿は昭和 7 年 (1932) に建て替えられたもので、当時の設計書には「様式 沖津宮造り」という新たな様式名が記されていることから、当時、沖ノ島に位置する沖津宮に相応しい社殿を創り出そうとしていたことがわかる。また、木材などの資材運搬については地元氏子の勤労奉仕により行われた。昭和 7 (1932) 年 1 月 26 日に神湊に到着した木材は神湊地区の住民によって荷揚げ後、加工場のある辺津宮の作業場まで運搬され、大島の漁師組織である「沖ノ島仲間」の協力によって漁船で沖ノ島まで運ばれた。このほか、設計や施工に関しても地元建築士や宮大工が関わるなど、神社のために地域が一体となってこの事業を成し遂げた。

##### イ 宗像大社中津宮

中津宮は九州本土から 11 km 離れた人口 700 人ほどの福岡県最大の島である大島の南西部に位置している。中津宮は宗像三女神のうち湍津姫神が祀られ、境内は宗像神社境内として国の史跡に指定されている。中津宮社殿は 14 世紀後半ごろに成立した『宗像大菩薩御縁起』において大島に 23 の中津宮末社を確認できることから、少なくとも鎌倉時代末頃には建てられていたと推測できる。弘治 2 年 (1556) 「大島第二宮年中御神事次第」では、御嶽神社を「上宮」、中津宮を「本社」と記しており、少なくとも 16 世紀には、御嶽神社と中津宮社



宗像大社中津宮の本殿・拝殿  
(本殿は福岡県指定有形文化財(建造物))

殿が並立する現在のような境内が形成されていた。中津宮本殿は 3 間社流造、<sup>こけら</sup>柿葺で、正面に 1 間の向拝を持つ。平成 9 年 (1997) の解体修理に伴う調査によって承応 4 年 (1655) の年紀をもつ墨書が発見

されたことから、この時期に造営された可能性が高い。近世の境内の様子を示すものとして、江戸時代後期の『筑前国続風土記附録』「大島図」がある。図には中津宮本殿・拝殿を中津宮本社とし、その周辺に末社が描かれている。また、境内前面の階段下には2つの中島を持つ池やそこに架かる橋、鳥居があり、境内西側を流れる天ノ川や牽牛社、七夕社、天真名井が描かれており、ほぼ当時の姿のまま現在に至っている。

御嶽山山頂に位置する御嶽神社は、参道から山頂までが宗像大社の境内地として国の史跡に指定されている。ここには、中津宮の湍津姫神の荒魂あらみたま（荒々しい側面）が祀られ、麓の中津宮と一体となり信仰の対象となっている。



『筑前国続風土記附録』「大島図」

## ウ 宗像大社辺津宮

九州本土の田島地区に位置する辺津宮は『古事記』『日本書紀』に「邊津宮」と記載された場所へつみやで、ここでは8世紀から9世紀にかけての沖ノ島祭祀遺跡と同様の遺物の散布が確認されていることから、この時期にはすでに宗像大社沖津宮・宗像大社中津宮・宗像大社辺津宮の三宮が成立していたと考えられている。三宮では祭祀の形態が変化する過程で後に社殿が建てられたとみられている。辺津宮における社殿の記録は中世になって初めて確認できる。12世紀初めに社殿の消失、再建を記した記録があり、また、近世初頭の「宗像社頭古絵図」は辺津宮境内を描いた最古の絵図で、中世の境内の状況を最も良く表している絵図とされる。その後、宝暦3年（1675）に境内が整備され、現在まで大きく変わることなく維持されている。元々あった本殿・拝殿は弘治3年（1557）に焼失したが、本殿は宗像氏最後のうじさだ大宮司宗像氏貞によって



宗像大社辺津宮の本殿・拝殿(重要文化財(建造物))



天正6年(1578)に再建された。さらに拝殿は大宮司家断絶後、筑前国に入城した小早川隆景によって天正18年(1590)に再建され、修理修復を繰り返しながら現在に至っている。本殿・拝殿は国の重要文化財に指定され、本殿は5間社流造、柿葺で、身舎桁行5間、梁間4間、向拝桁行3間、拝殿は切妻造妻入、瓦葺で、桁行6間、梁間正面1間背面3間の社殿である。また、本殿・拝殿の周囲には宗像地域の75の末社108神が祀られており、これらの社殿は18世紀前後に建てられたとみられ、毎月1日と15日の月次祭には、神職および氏子らにより拝礼が行われている。



このほか、辺津宮の真っ直ぐ伸びた石畳の参道上、本殿・拝殿の直前には大きな神門が位置している。参拝者や神職は参拝や祭事の際に必ずこの門を通り透塀に囲まれた市杵島姫神の鎮座する神域の中心へと向かう。神門は昭和15年(1940)に建造されたもので四脚門、銅板葺である。

辺津宮は九州本土に位置することから、数多くの参拝者で賑わいをみせるとともに、宗像大社における神事の中心として今もなお多くの人の信仰を集めている。

本殿の周囲にある75の末社



## エ 宗像大社沖津宮遙拝所

大島の北側沿岸部の岩瀬地区に位置する沖津宮遙拝所は本殿を持たず、御神体である沖ノ島を直接拝むために拝殿のみが建てられたもので、国史跡宗像神社境内のひとつに指定されている。『宗像神社史』によると、江戸時代に沖津宮を奉斎する社家の家系である一ノ甲斐河野氏が常時の祭祀を執り行うため、屋敷を構える大島に沖津宮遙拝所を設けたことがその起源であるとされる。境内には「澳島拝所」と刻まれた石碑に「寛延3年(1750)」と刻まれていることから、この頃には沖津宮遙拝所は存在していたと考えられる。近世以降の境内の様子を示すものとして江戸時代後期の『筑前国続風土記附録』「大島図」があり、ほぼ現在の位置に沖津宮遙拝所をみることができる。明治時代の「明治八年沖津宮全図」には遙拝所・末社正三位社・神饌所・奉幣使幄舎・神官控所などの建物や灯籠・垣が設置されていたが、神饌所・奉幣使幄舎・神官控所は昭和2年(1927)の遙拝所改造に伴い撤去された。現在の遙拝所は昭和8年(1933)に建てられた。梁間4.15m、桁行5.58m、入母屋造一部切妻造、妻入、銅板葺で沖ノ島を向いて建つ。主棟の側面には切妻造、梁間3.13m、桁行8.97mの神饌所と楽人所が連結し、T字型に棟が交差する変化に富んだ屋根の形状をしている。



宗像大社沖津宮遙拝所

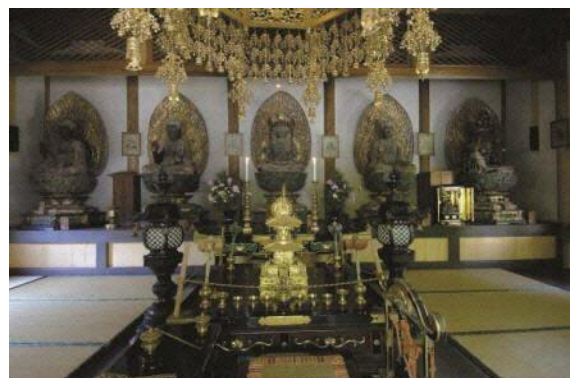
## オ 鎮国寺本堂

鎮国寺は、弘法大師空海の開山と伝えられる真言宗の寺院で、宗像大社辺津宮の東側を流れる釣川対岸の山の中腹に位置する。寺の由来を記した『寺院帳』（江戸時代中期頃）によると、創建は鎌倉時代中期、弘長3年（1263）に時の領主宗像大宮司長氏が土地と本堂を寄進して、僧の皇鑿こうがんに寺を創建させた。以来、鎮国寺は、宗像大社の神宮寺として栄えた寺院である。また、現在も両社の関係は続いており、毎年10月1日から3日行なわれる宗像大社の秋季大祭では、秋季大祭1日目に鎮国寺住職が玉串拝礼を行い、鎮国寺で年に一度、4月28日に御開帳される重要文化財の木造不動明王立像の御開帳には宗像大社の神職も参列している。



鎮国寺本堂(宗像市指定有形文化財)

季節の花々や木々に囲まれた境内には悠久の歴史を物語る数多くの文化財が残されている。鎮国寺本堂は、市指定有形文化財で、入母屋造銅板葺の構造をとり、永禄10年（1567）に大友勢の侵攻によって消失した本堂に代わって江戸時代前期の慶安3年（1650）に福岡藩の2代藩主黒田忠之くろだただゆきが再建させたものである。当初は茅葺の堂だったが、昭和53年（1978）の修理によって銅板葺になっており、その部材の大部分は再建時の



宗像五社本地仏(福岡県指定有形文化財)

ものと考えられる。建物内には鎌倉時代から南北朝時代に制作された福岡県指定有形文化財の宗像五社本地仏が安置されている。本地仏とは、仏や菩薩が人々を救うために神となって現れるとする「本地垂迹説」に基づいて製作された仏像で、5体の仏像にはそれぞれ宗像三神（田心姫神・湍津姫神・市杵島姫神）と許斐権現神社の御祭神三所権現さんしよと織幡神社御祭神竹内宿禰おりはたごさいじんたけのうちのすくねの名が付されている。

## （5）秋季大祭にみる歴史的風致

秋季大祭は10月1日から3日間宗像大社辺津宮で行われ、宗像大社の祭事の中で最も賑わいをみせる祭事であり、『応安神事次第』（1375）によると宇佐八幡宮と石清水八幡宮の儀式を倣って始めた放生会に由来すると言われている。また、『宗像大菩薩御縁起』（鎌倉末期成立）によると、当時は旧暦の8月13・14・15日に放生会が行われていた。その後、放生会は延宝8年（1680）に9月1日に変更され、明治時代以降は、太陽暦の採用によって10月1日に変更された。地元では、「田島様」たしま「田島放生会」と呼ばれ親しまれ、古くから続く祭事である。



みあれ祭の海上神幸

秋季大祭は『正平二十三年年中行事』（1368）にみられる中世の神事「御長手<sup>みながてしんじ</sup>神事」を参考に昭和37年（1962）から新たに付け加えられた「みあれ祭」で幕を開ける。

みあれ祭の「みあれ」には、沖津宮の田心姫神、中津宮の湍津姫神、辺津宮の市杵島姫神が年に一度お会いになり、新たな神として「御生まれ」になるという意味がある。みあれ祭は秋季大祭初日の10月1日に行われ、中津宮と沖津宮の神様が太島の中津宮から九州本土の辺津宮まで御神幸されるもので、陸上神幸と海上神幸からなる。

今日みられるみあれ祭は、出光興産の創始者である宗像市出身の出光佐三が会長となった「宗像神社復興期成会」（昭和17年（1942）結成）によって再興されたものである。「御長手」の起源については『宗像大菩薩御縁起』（時代不詳鎌倉末期か）に記されている。

再興に際しては、宗像七浦（神湊・鐘崎・大島・地島・福間・津屋崎・勝浦）の漁民が「海洋神事奉賛会」を発足させ、沖ノ島の祭事を支えてきた大島の住民（沖中両宮奉賛会）も協力するなど、地元住民も一体となって新たに始まったみあれ祭を支えた。



放生会の開催を伝える記事  
（昭和37年（1962）：社報「宗像」より）



みあれ祭再興を伝える記事  
（昭和37年（1962）：社報「宗像」より）

## ア 沖津宮神迎え神事

10月1日のみあれ祭に先立ち、大島の住民が中心となって、例年9月中旬の天候が良い日に沖津宮の田心姫神を大島の中津宮にお迎えに上がる。これを沖津宮神迎え神事と言う。前日には宮司以下3人の神職が大島に渡り、神様をお迎えする大島の御座船の船長らも参列して「渡島祈願祭」が行われる。神様をお迎えする御座船に選ばれることはとても名誉なことで、宗像の数ある浦々の中でも大島の住民が必ず沖ノ島の神様



御座船

をお迎えしている。

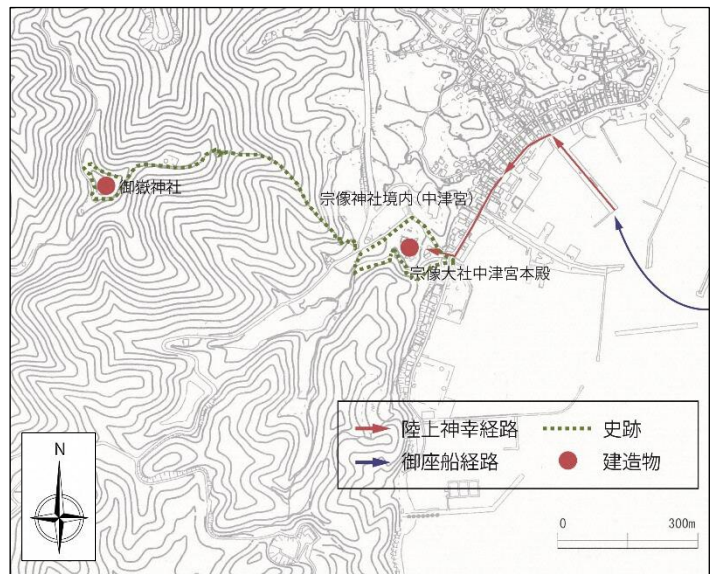
神迎え神事の朝は早い。翌朝午前6時、船首に波切御幣をつけ、「国家鎮護」の大幡、紅白の吹き流しで飾られた御座船に関係者が乗船し沖ノ島へ向かう。

玄界灘の波に約2時間揺られ、午前8時前に沖ノ島に到着する。海中で禊を行い、息を切らしながら沖津宮へ続く長く急な階段を登り沖津宮本殿へ到着すると、出御祭が行われ、沖ノ島の神様は沖津宮を出発する。神職は神璽と共にお祓いをしながら参道を下り、港の御座船へ向かう。一行は直会の後、沖ノ島を出発する。直会では、沖ノ島での思い出話もあり、「おかみさま」という言葉が会話の端々から聞かれ、皆が沖ノ島や三女神を大切にしていることがよく分かる。

直会の後、沖ノ島を出発した御座船は正午頃に大島に到着する。御座船が港に到着すると、島内放送が流れ、沖ノ島の神様が大島に到着したことが島内に知らされる。一行は大島駐在員の先導を受けながら市街地を通り中津宮まで陸上神幸を行い、この時、玄関先にはお迎えをする島の住民が深々と頭を下げる姿があり、神様のお通り沿線は厳かな雰囲気にも包まれる。中津宮到着後、入御祭が行われ、終了後は、無事に沖ノ島の神様をお迎えできたことを皆で喜びながら、関係者一同で直会をする。



大島へ到着した神璽を中津宮へお運びする陸上神幸



大島港から中津宮までの陸上神幸経路

## イ 総社地主祭・宵宮祭（9月30日）

みあれ祭の前日、午後6時より大祭の無事を祈る宵宮祭が行われる。

## ウ 秋季大祭

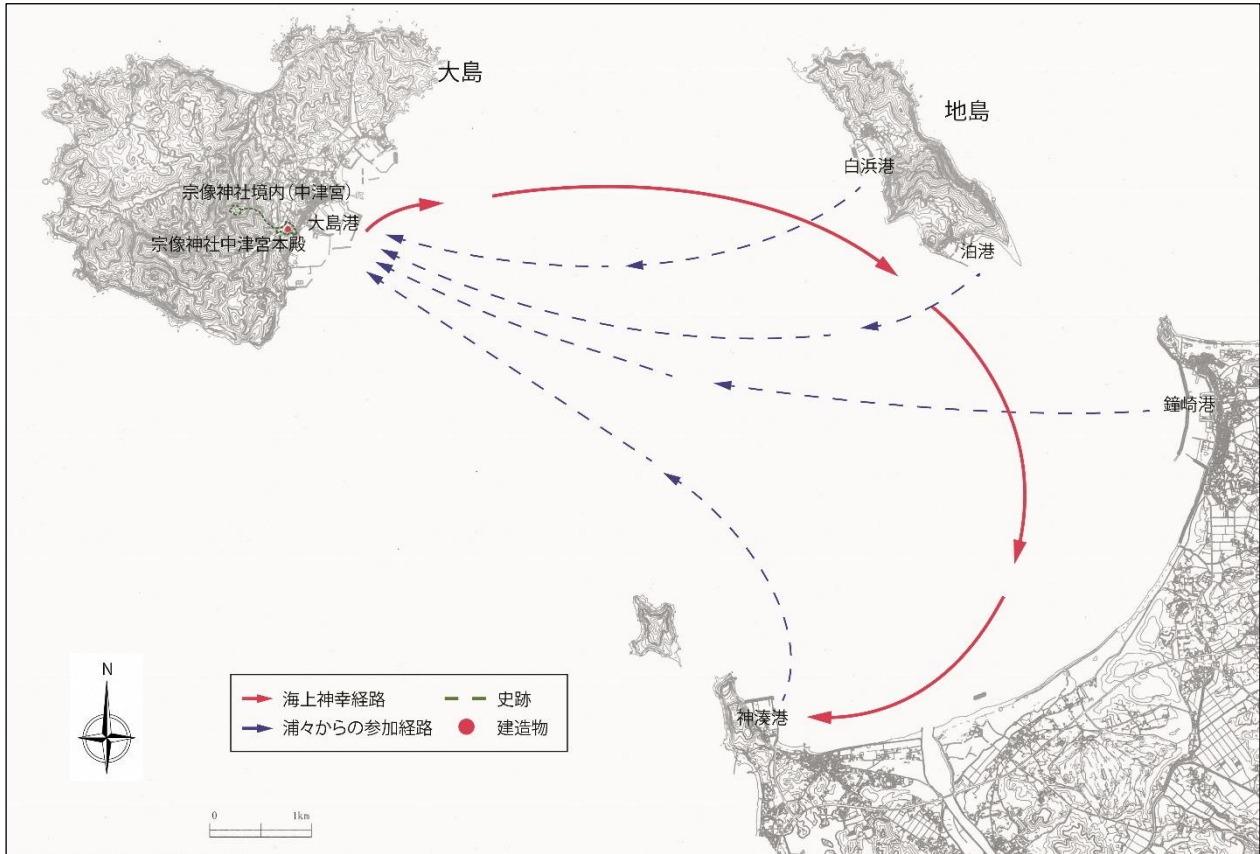
秋季大祭は10月1日～3日まで行われる。

### ① 1日目（10月1日）

秋季大祭初日、午前8時30分の出御祭の後、沖津宮の田心姫神、中津宮の湍津姫神は、大島と鐘崎の地元の青壮年の人たちによって大島港まで運ばれる。沖津宮の神様は鐘崎の青壮年が、中津宮の神様は大島の青壮年の人たちがお連れする。青壮年たちは白衣・白袴・白足袋に黄色の袍をつけ烏帽子を被



みあれ祭に参加するため浦々から大島港へ集まった漁船



大島から神湊までの海上神幸(みあれ祭)経路

り白鉢巻の装束を身にまとう。御神輿にはそれぞれに青壮年8人と奉行がつき、神門を出たところから大島小学校の鼓笛隊に先導され大島港の御座船まで御神幸する。

この頃、大島港は大漁旗をなびかせ、各浦々から沖津宮、中津宮の神様をお迎えに上がった多くの漁船で埋め尽くされている。大漁旗の取り付けられる竹は辺津宮周辺で切り出されたものが使用されている。各漁船では「お神酒あげ」と言っ、て、前日釣って生け簀に生かしておいた魚を刺身にしたもの、うに飯などのおむすび、お重には煮しめや白蒲鉾、卵焼きなどの御馳走、地酒などを船上で振る舞う姿がある。

午前9時20分、待ちに待った勇壮な海上神幸の幕が上がる。打ち上げ花火を合図にまず先導船が出港した後、漁船は大きなエンジン音を響かせながら船団を整える。沖津宮先導船、沖津宮御座船、中津宮先導船、中津宮御座船、供奉船、その後ろには波切御幣のつけ飾りをした各浦の随行船がつく。沖津宮、中津宮の神様がお乗りになる御座船は、神様への感謝の気持ちを込めて、新造船や改修したての船が選ばれる。御座船は100隻以上の船団を従え、神様が宗像の浦々の様子を巡検するかのよう大きな弧を描きながら神湊までお向かいになる。一帯には数多くの漁船が大漁旗をなびかせる姿と玄界灘の青い海、浦々の背景に広がる山々の緑が重なりあい、勇壮かつ壮大な光景が広がり、その姿を一目みよう海上神幸を一望できる海岸は



頓宮に到着した沖津宮・中津宮・辺津宮の三神

見学者で

埋め尽くされる。



神湊から辺津宮までの神幸経路

午前 10 時に辺津宮での出御祭を終えた辺津宮の市杵島姫神は神湊へ向かい、海上の御座船で沖ノ島と大島の神様を迎える。二神が到着すると、3 隻の船は神湊近くに停泊し、供奉船が大きなエンジン音を響かせながら右回りで旋回し御座船にお賽銭を投げ入れ、海上神幸は最も盛り上がりを見せる。

午前 10 時 30 分、御座船は神湊に入港し、3 台の御神輿は頓宮へ神幸する。頓宮到着後の午前 10 時 50 分、神璽は御神輿から出され頓宮祭が行われる。その後、神璽が御神輿へ戻されると再び陸上神幸ははじまる。御神輿は宗像大社氏子青年会の青年が神湊郵便局までお運びし、玄海小学校の児童による稚児行列も加わる。また、神幸のお通りになる沿線には家々の軒先に御神灯や国旗が掲げられ、人々が頭を下げる姿があり、地域住民皆で神様をお迎えしている雰囲気を感じられる。

午前 11 時 40 分、辺津宮の鳥居前で車を降りた神璽は 3 人の神職が捧げ持ち、出店が並び、三女神がお集まりになる姿を見ようと多くの参拝者で賑わう参道を通って神門をくぐると、拜殿正面から昇殿し

て本殿に安置され、ここに三女神はみあれ祭のすべての行程を終える。

三女神が辺津宮に到着後、宮司の祝詞奏上ののち、昭和 53 年（1978）に指定された市無形民俗文化財の主基地方風俗舞が奉納される。主基地方風俗舞は昭和天皇の即位にあたり最初の新嘗祭である大嘗祭の主基斎田に福岡県早良郡脇山村の田が選ばれた際、主基地方の風俗舞として舞われたもので、福岡県下で保存伝承する趣旨から昭和 4 年（1929）に宗像大社に特別に下賜された。その後、昭和 53 年（1978）に主基地方風俗舞保存会が結成され、今日では地元根付いた秋季大祭を彩る行事のひとつとなっており、地元で親しまれている。その後の玉串拝礼では宮司に続き、かつての神宮寺鎮国寺の寺僧が拝礼する。

みあれ祭が終わると、海上神幸に参加した船は浦々に帰り、海上神幸の行われた一帯は日常の姿に戻る。浦々では船が戻ってきた後、直会をするところもある。この日、みあれ祭に船を出した浦々は、漁を行わない。

## ② 2日目（10月2日）

2日目も三女神に日々の暮らしの感謝を伝えるための様々な奉納がある。神門前馬場で午前 8 時から始まる流鏝馬神事は的を射ることを目的としないもので、「矢を拾うと子宝に恵まれる」という意味があり、境内には参拝者が落ちてきた矢を競って拾い持って帰る光景が広がる。その後、午前 11 時には本殿で秋季大祭二日祭が斎行され、郡内神職奉幣、氏子奉幣、翁舞が奉納された後、午後 2 時には境内にある末社すべての灯籠に火が灯され供物、祭典が行われる。境内では、本殿だけでなく末社に参拝する参拝者の姿も多い。境内は夜遅くまで出店に明かりが灯され、親に連れられ参拝を楽しむ子どもたちの姿もあって、1日目に引き続き、多くの参拝者で賑わう。

## ③ 3日目（10月3日）

秋季大祭最終日は、午前 11 時から本殿で祭典が行われる。玄海中学校 2 年の女子生徒 4 人が浦安舞を奉納する。その年に舞った生徒が次の舞手を決める形で代々受け継がれてきた。練習は春季大祭の 2 カ月前から行い、毎年、春季大祭と秋季大祭で奉納している。

午前 11 時 40 分、高宮祭、第二宮祭、第三宮祭、宗像護国神社祭が行われる。

午後 6 時から秋季大祭を締めくくると高宮神奈備祭が行われる。この祭事は中世 12 月 25 日に行われていた「八女神事」を再興させたもので、高宮祭場では、宮司による祝詞奏上の後、松明と提灯の明かりの下で氏子青年会の先導により参列者たちが繰返し古歌を奉唱し、巫女による神楽舞が奉奏される。氏子青年会は旧宗像郡の青壮年の会で、先祖代々の氏子に加え新住民も参加し、今では宗像大社の祭事を支える欠かすことのできない存在となっている。このように、宗像大社の秋季大祭では、様々な場面で崇拜者や氏子が積極的に祭事に関わっており、地域住民の理解と支援のなか地域の祭りが形づくられている。



多くの参拝者で賑わいをみせる辺津宮境内

## (6) 古式祭にみる歴史的風致

宗像大社辺津宮はその東側を釣川が流れ、西側に釣川に平行して走る標高100m前後の山並に挟まれた地点に位置している。辺津宮の周囲には田園風景が広がり、大字を田島と言う。このことから、辺津宮は長らく田島宮と呼ばれていた。現在の古式祭は1年の収穫を感謝する祭として12月15日に近い日曜日に行われている。辺津宮で行われる古式祭は江戸時代以来、地元の氏子が役割を担って毎年準備を進めてきた祭事である。

### ア 農業の神としての宗像大社

辺津宮は江戸期以来、田島村（現在の田島地区）の氏神的性格を持っており、古式祭は秋の収穫を氏神に感謝するという田島村の宮座という意味もあった。古式祭をみると宗像三女神は交通や漁業の神としてだけでなく、農業神的側面も持ち合わせていることが分かる。

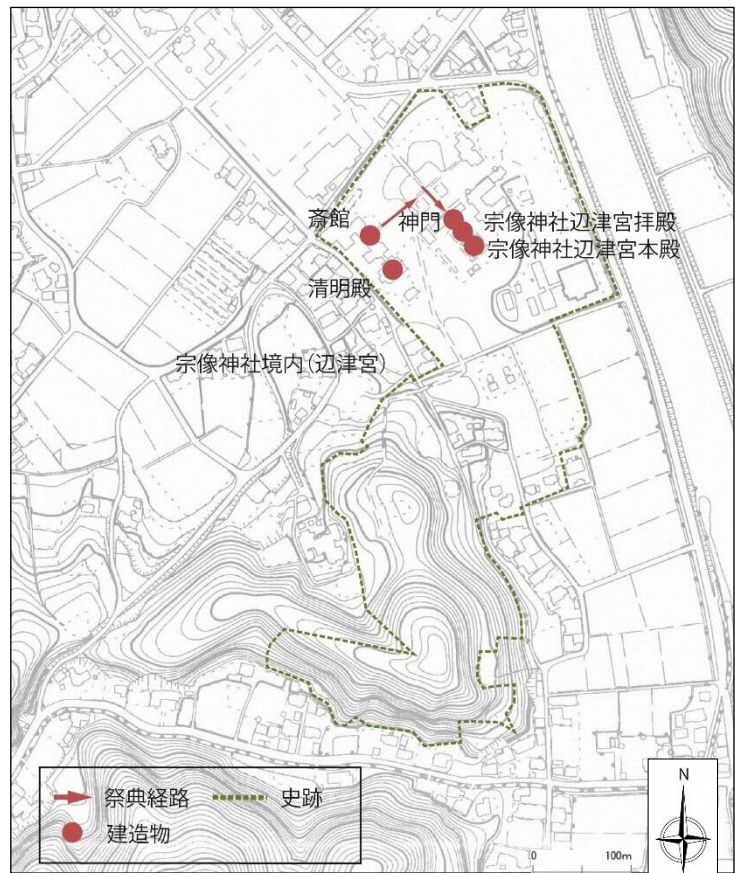
『津屋崎の民俗』（1998）には、旧宗像郡内である福津市の沿岸部に位置する津屋崎地域の本村や塩浜といった農村は、田植えが終わった7月頃に集落の浜辺において、各家で準備した神酒・赤飯・なます等の神饌を備え、田植えが無事終えたことを感謝し、家族の無病息災を祈り、宗像大社沖津宮の位置する沖ノ島を遙拝していたことが書かれている。これを「沖ノ島籠り」と呼ぶ。また、『昔騙り福間あのころ』（1992）によると浜辺の地域だけでなく内陸部の手光地域でも「沖ノ島籠り」を行っていたことがわかる。

### イ 古式祭の歴史

古式祭は明治時代以降に称するようになったもので、それ以前は、宗像祭や惣社祭と呼ばれ、旧暦の11月15日に行われていた。『筑前国続風土記附録』（1793）では宗像祭の名で祭事を見ることが出来る。宝暦8年（1758）の『御宮霜月祭帳』によると、田島村は4組に分かれ、この祭に奉祀していた。

### ウ 現在の古式祭

現在、古式祭は田島地区の上殿・福田・吹浦・片脇・本村・宿谷・山下・飛松の8組が毎年交代しながら当番を務めている。元来は田島地区の行事だったが、今は田島地区の当番を中心に「古式祭御座<sup>おぎ</sup>保存会」が結成され現在も受け継がれている。供物や料理は保存会が準備をしているが、御座には一般の人も参加できる。



古式祭祭典経路



## エ 神饌

古式祭では三女神それぞれに「御菓子」と呼ばれる神饌が準備されお供えされる。通常、祭典での神饌は生ものが使用されるが、古式祭では、熱を加えたものも神饌に使用され、炊いたごはんが供えられる。

神饌からは、収穫に対する感謝の気持ちや地元の間わりがよく分かり、海や里に恵まれた宗像の産物を使用されている。また、台盤の中央にはゲバサモがあげられるが、これはホンダワラに似た食用の海藻「アカモク」で、宗像の名産品としても知られている。ゲバサモは釣川河口に位置する江口地区の人々が古式祭前に何度も地区の浜（江口浜）に通い、より良いものを準備し、使用している。なお、神饌には生のゲバサモをあげ、お座では調理味付けした藻が出される。また、神饌の備えられる台をみると、四隅にコップ状の竹籠が置かれているが、これらは田島地区の氏子らが準備する。この中には新蕨を半紙で包んで差し込み、これに竹串に扇状に切った九年母（柑橘類の原種の一つ）と1辺3cm程度に切った菱餅が挿される。現在、九年母は辺津宮の境内で採れたものが使用されているが、以前は吉田地区が準備していた。菱餅は田島総代が新米をついて準備をしているが、以前は多礼地区が準備していた。さらに、『宗像神社史 下巻』（1966）によると菱餅・九年母のほかに昔はノシアワビも挿していたという。



神饌



ゲバサモ

## オ 祭典

御座に先立ち、祭典が辺津宮本殿および拝殿で行われる。夜明け前の午前6時、齋館で祓を済ませた宮司以下役員、祭員に続いて、田島区長・古式祭当番代表・江口区長・江口当番代表・氏子総代会長などが拝殿へ参進、昇殿する。幄舎には一番座に座る人々が着座する。修祓に続き、宮司が五穀豊穰を感謝する趣旨の祝詞をあげ、その後「古式祭古歌」が祭員一同によって奉唱される。参加者の息も白く、静けさのなかに凜とした空気が漂っている。奉唱が終わると玉串を捧げ、本殿での祭典は終了する。



祭典

## カ 御座

御座は清明殿で行われる。料理の材料は宗像大社で手配し、調理は当番の組の女性が祭典当日の早朝、午前4時30分から行う。当番は御座の前日から神饌などの準備を行い宗像大社辺津宮に泊まり込んでいる。

午前5時より一般の御座券の売り出しがはじまる。座は午前6時30分にはじまり、1番座から5番座

までである。また、4番座には当日行われる鎮火祭に参列する消防団関係者、5番座には田島の御座関係者が座る。神座に神台が一台改めて供えられるとともに、その前にこもで編まれたあらむしろ新筵が敷かれ、中央に宮司が座る。左右にはゲバサモを持ってきた江口の代表が座り、正面右には神職、左には太鼓が据えられている。正面に敷かれた新筵は、毎年、田島地区が新たに作り準備している。大広間には机が4列並べられ、座に参加する人は新筵の上に着座する。

一同着席後、太鼓が一鼓打ち鳴らされ、厳かな雰囲気の中でお座が始まる。神職がお祓いを行い、次に白衣白袴の当番が頭を垂れた座の参加者の上を御幣で禊っていく弊引きが行われる。その後、御神酒をついでまわり神酒拝戴を行い食事に移る。食事では当番が桶に入った味噌汁をついでまわり、菱餅をのせた紙の上に供物である味をつけたゲバサモを分けてまわる。また、食事中にはくじ引きが行われ、翁面・神杯・干支鈴・中木札・小木札が賞品として渡され、さらに全員には開運小守が授与される。食べ終わる頃に再び太鼓の打ち込みがあり、一鼓の後解散となる。

早朝午前5時にゲバサモを届けた江口地区の住民は宗像大社から御礼に神酒二升をもらい、地区に戻る。地区では氏神の辻八幡宮にゲバサモを供えて祭を行った後、公民館で座が行われる。江口地区は6組あり、1年ごとの交代で当番を務めている。



弊引き



御座料理

## (7) 七夕祭りにみる歴史的風致

8月7日に大島の宗像大社中津宮で行われる七夕祭りは、中津宮で最も盛んな祭事である。七夕祭りは志賀海神社など海の神を祀る神社で盛んで、かつて海を航海した海人たちの信仰の名残とも考えられている。

### ア 歴史

中津宮の七夕祭りは14世紀頃から記載が見られ、それぞれ、『応安神事次第』（1375）中に「七月七日七夕虫振神事」、『大島第二宮年中御神事次第』（1556）中に「七月七夕」、『大島第二宮年中御供米之事』（1553）中に「七月棚織」、『第二宮御神事次第』（1692）中に「七夕棚機御神事」とある。

江戸時代に儒学者の貝原益軒により七夕祭りのことが紹介されている。『筑前国続風土記』（1703）巻16宗像郡上大島の条に「社前に天の川流。この川御嶽の下よりいつ。その川のはた左右にわかれて、牽牛・織女二星の小社あり。川をへたてたり」と記されており、その記載通り、現在も中津宮に向かい右手に牽牛社が、左手に織女社が天の川を隔てて位置している。牽牛・織女社は縁結びや芸事上達としての信仰を集めている。

### イ 現在の七夕祭り

現在の七夕祭りは、中津宮の牽牛社と織女社の間にある中津宮境内の鳥居を囲んで行われる。過去の七夕祭りの様子は昭和41年（1966）の社報「宗像」にもみられ、祭典や七夕踊りについての記事がある。そこにみられる内容は現在と変わらず、50年以上もの間、大島の人々に守られ脈々と受け継がれてきた。祭典は午後8時から行われるが、現在は祭事の前後に地元の催し物も企画され、大島住民の手によって早朝から準備が進められる。準備は地元の子供たちも一緒になって行い、大人から子供へ伝統は受け継がれる。

中津宮周辺と大島港渡船ターミナルから緑地公園までの道路沿いは七夕飾りの笹竹が立てられ、笹竹は大島で採れたものが使われる。また、境内には御神灯が灯されると共に、さまざまな願いが書かれた五色の短冊で飾られた七夕の笹竹が立てられ、境内は七夕の雰囲気包まれる。さらに織女社に向かって周囲に柴垣を立

てた通  
常とは

七夕踊り



道路沿いの七夕飾り

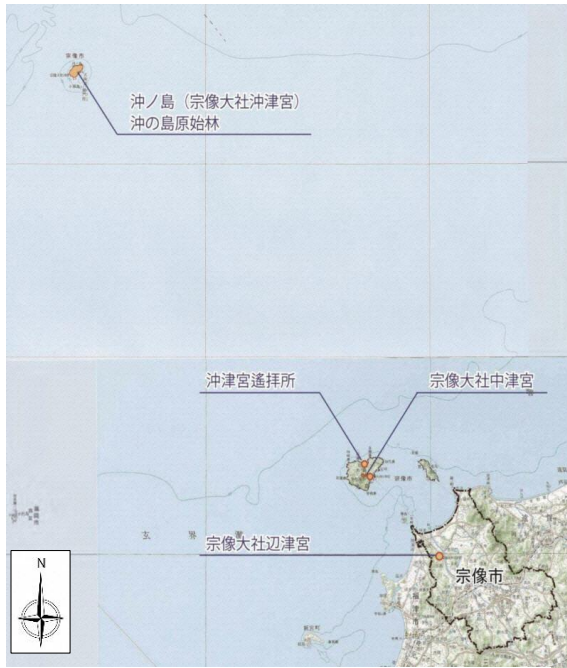


異なる祭壇が設えられ、両脇に笹飾りが立てら

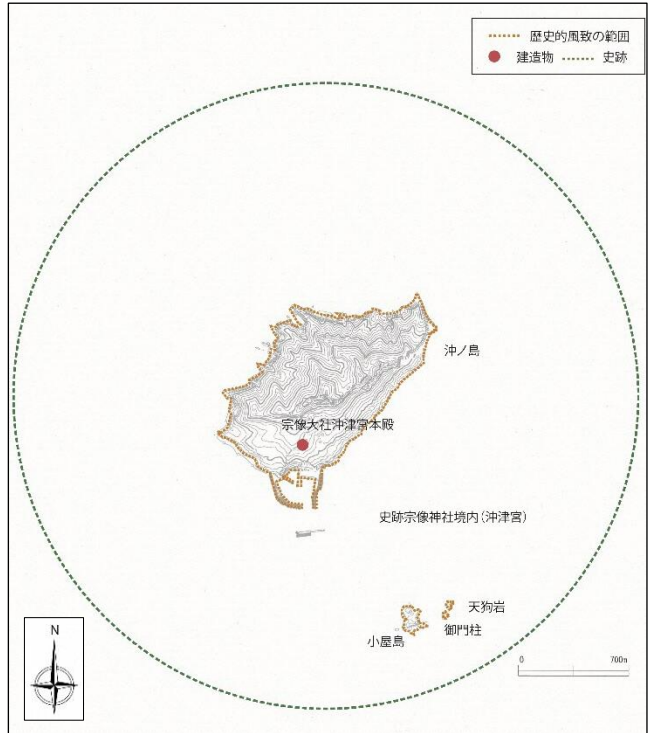
れる。笹には着物形の短冊を吊し、祭壇にはスイカやサザエなど夏の祭事らしい神饌が供えられる。

境内は夕刻すぎから多くの参拝者で賑わい、この日に限っては、午後9時30分に九州本土の神湊港までの臨時フェリーが出される。七夕祭りに合わせた催しでは、境内に隣接した緑地公園でコンサートなどが行われる。日が沈み始めると中津宮境内の竹灯にロウソクやペンライトが点灯され、ペンライトは

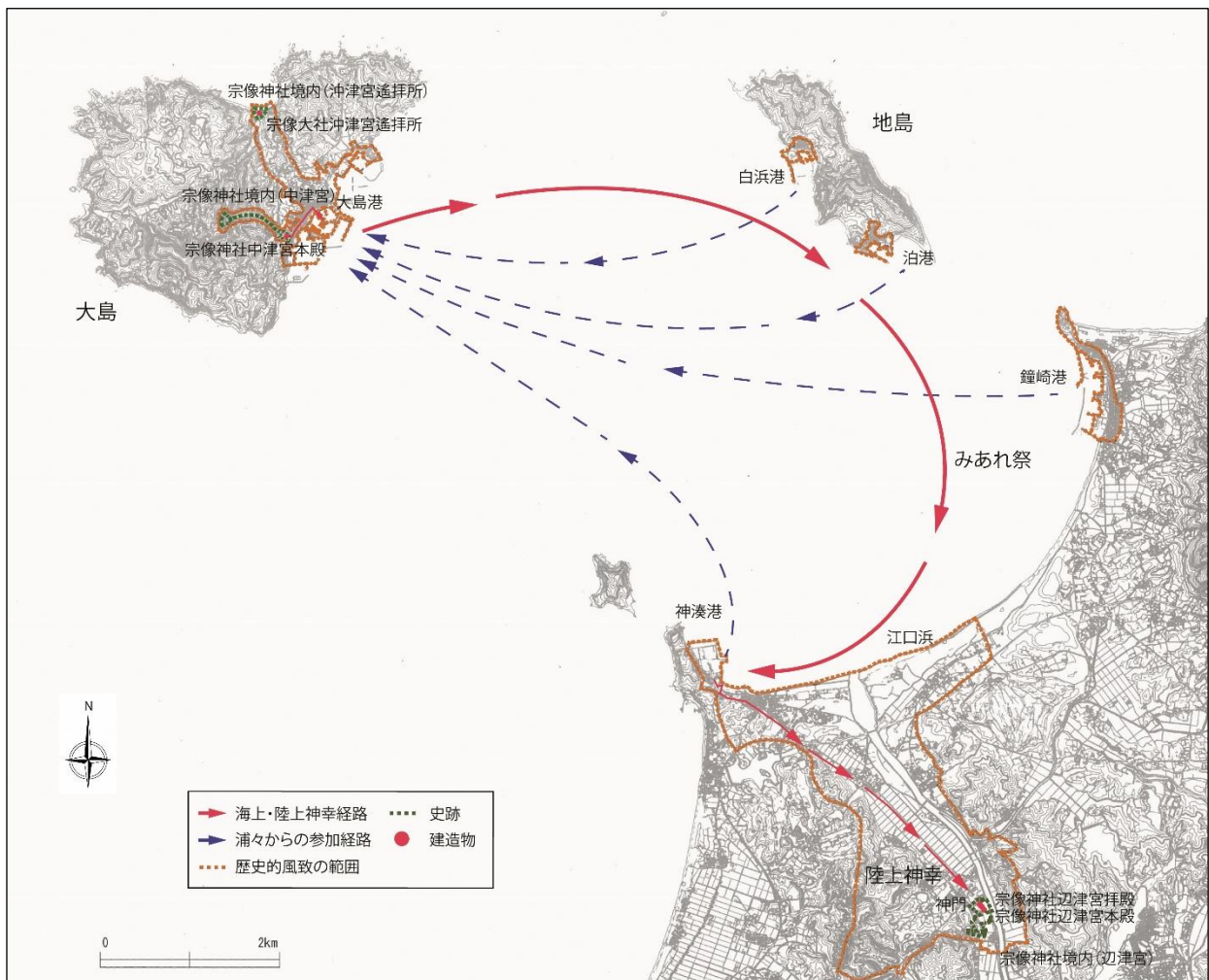




宗像大社(沖津宮、中津宮、辺津宮)位置図



宗像大社にまつわる歴史的風致の範囲(宗像大社沖津宮)



## 2. 宗像の浦々にみる歴史的風致

### (1) はじめに

宗像地域の近海は古来より漁業資源に恵まれ、人々は豊かな生活を送ってきた。沿岸部の遺跡では古くは縄文時代から海と共に暮らしてきた人々の生活の一端を垣間見ることができる。本市の北側玄界灘沿岸部に位置する鐘崎<sup>かねざき</sup>、神湊<sup>こうのみなと</sup>、離島の大島<sup>おおしま</sup>、地島<sup>じのしま</sup>の浦々で現在も多くの人々が漁業を生業とし、中でも鐘崎漁港の魚の水揚量は県内有数である。また、これらの浦では海の豊かな恩恵を受ける一方、「板子板一枚下は海地獄」と言われるように、海と共に暮らす人々は常に死や危険と隣り合わせだったため、その信仰や祭事には海に暮らす人々の海からの恵みに対する感謝と自然や万物に対する畏敬の念が込められている。そして日々の暮らしの中で豊漁と航海安全を祈り、感謝を捧げる様々な神様がいて、その信仰や風習が浦々で今も息づいている。

### (2) 海と共に生きた歴史

沿岸部に暮らす人々の歴史は古い。鐘崎地区の南西の松に覆われた砂丘上に位置する鐘崎(上八)貝塚は縄文時代後期のもので、そこからは縄文土器と共にサザエやアサリなどの貝類をはじめ、石銚や骨製釣針などの漁撈具が見つかっており、この時代の沿岸部における人々の生活がわかる。また、神湊地区の浜宮貝塚は古墳時代の遺跡で、宗像大社浜宮が位置する砂丘を中心に広がっている。現在は住宅が立ち並んでいるが、畑などの地面には、無数の貝殻や土器が散乱している。浜宮貝塚は昭和46年に筑紫野史学研究会によって発掘調査が行われ、遺跡からはサザエやアワビとともに、銚などの漁撈具が出土している。当時、ここには、当時沿岸部で暮らす人々の拠点集落があり、多くの人々が海と共に暮らしていたことがうかがえる。



鐘崎の海女

江戸時代には沿岸部の集落は宗像七浦(神湊・鐘崎・大島・地島(宗像市)福間<sup>ふくま</sup>・津屋崎<sup>つやざき</sup>・勝浦<sup>かつうら</sup>(福津市))と呼ばれた。神湊では浜宮<sup>はまみや</sup>の鳥居は、イワシの地引網が盛んだったことを示す文字が刻まれている。また、鐘崎では江戸時代から海女漁が盛んで、日本海沿岸の海女発祥の地とも言われており、地島では、網漁が盛んで、コチ・ブリ・タナゴ・マグロが捕られていた。さらに、大島では江戸時代前期の慶安年間(1648~1652)に藩主に献魚を行った記録があり、タイ地引網・イワシ地引網が盛で、幕末の天保年間(1830~1844)には鯨を捕って大きな収穫をあげていた。鯨漁の様子は19世紀初めに筑前の名



大島港からみた大島のまちなみ

所・風景を解説した奥村玉蘭おくむらぎょくらんの『筑前名所図会』中に「大島鯨組之図」として描かれている。明治5年（1872）に刊行された『福岡県地理全誌』には宗像七浦の保有船の数が記録されている。鐘崎は91艘（うち商船3）、神湊は58艘（うち商船12）、大島は124艘、地島は29艘（うち商船4）とあり、宗像七浦では漁業だけでなく、当時の主要な物流輸送手段だった廻船業も盛んであった。

良好な漁場を背景にした漁業を生業とする生活は、現在まで受け継がれている。今日、エンジンや繊維強化プラスチック船、レーダーの導入に

より漁獲量は著しく増加した。現在も鐘崎漁港の魚の水揚量は県内有数の漁獲量を誇り、なかでも外海産天然トラフグは全国1、2位となっている。

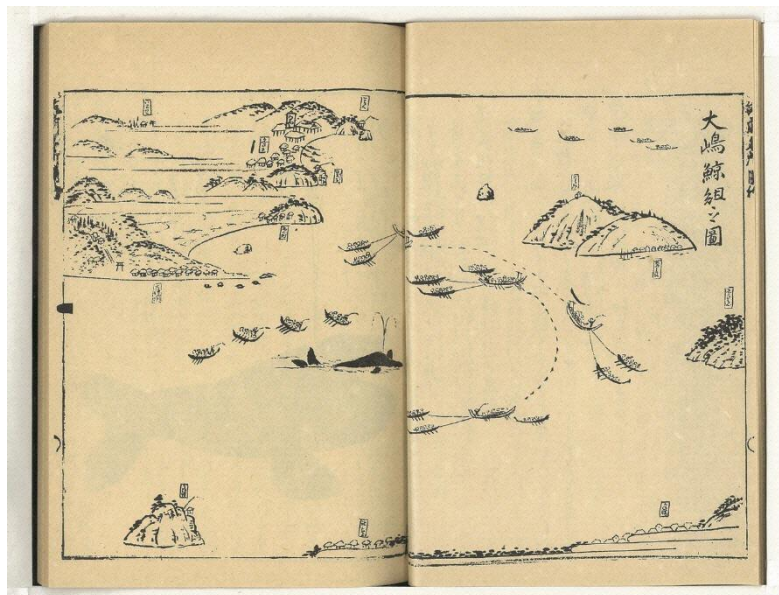
沿岸部で漁業を行う人々は、命をかけ自然を相手に漁を行っていた。それは、過去も現在も変わらない。浦々の人々は、長い歴史の中で天候や潮流、魚介類の生態を知る学術もなかった頃から、経験により漁の技術を編み出してきた。そのことを裏付けるように、機器が発達した現在でも、経験による先人の知恵が現在まで「ことわざ」として伝承されている。「ひとつドロン（雷）港を定め」という言葉は、雷が一つなれば強い雨が降るから避難港を決めておけという意味で、「七九の風」というのは、旧正月から数えて7・9・63日目に強風が吹くので、その頃を注意しろというものである。また、「正月の手の裏返し」は、旧暦2月は南東の風が強いだけに、北西の風は3倍強くなるという意味で、「彼岸のさめじけ」は彼岸の入りじけは長続きしないが、さめじけは半月ぐらい続くことを言う。

### （3）浦々の暮らし

宗像の浦々には、恵比寿信仰や織幡神社の祭事以外にも大漁祈願、大漁満足、商売繁盛、家内安全、航海安全を祈り感謝するための様々な神様がいて、家々や公民館などでそれぞれ大切に祀られている。そこには浦々で暮らしてきた人々に代々受け継がれてきた伝統や祭事がある。これらの活動は、福岡県下で昭和38年（1963）に実施された民俗資料緊急調査の報告にも詳細に記されている。

宗像の漁村では、お日待ちは、正月の祭事で、家々や公民館などで行われている。特に鐘崎地区では盛ん

で、織幡神社の神職が1月4日から9日までの間に地区に約250件あるすべての家々を訪問し、床の間に祀られたトコノマサマを家の人々と拝礼し、1年の無事を願う。また、床の間には小餅や赤飯、大根・人参のヌタ和えがお供えしてあり、浦々の人々は初漁前に必ずお日待ちを行う。家々にはトコノマサマ



大島鯨組之図『筑前名所図会』



魚の選別作業風景

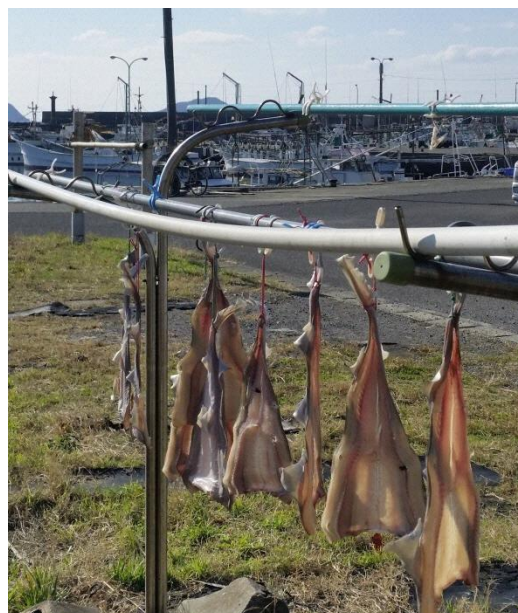
をお祀りするため、必ず床の間があり、家族全員が揃ってお日待ちを行う熱心な家も多く、子供の頃から神様が家の中にいて身近に拝む環境がある。

縄日待ちは春と秋の祭事で、宗像大社のみあれ祭のある10月1日には、秋の縄日待ちがある。みあれ祭の後、区ごとに公民館に集まって行われる。公民館には天照大神の掛軸が掛けられ、軸の下に御札が置かれ、織幡神社宮司の拝礼が行われる。

宗像の浦々では、水揚げされた魚を選別する姿、漁で使用した網を繕う姿などがあって、古くから営まれてきた日常の活動が漁業のまちならではの光景をつくりだしている。また、玄関先に年間を通じ注連縄を飾る習慣もある。

このほか、郷土料理の「のうさば」は「鐘崎かずのこ」とも呼ばれ、鐘崎地区の正月には欠かせない。

「のうさば」はホシザメ（星鮫）を背割りにし竹串で開いて1週間ほど潮風にさらし、干した後は熱湯で戻して、サメ肌をきれいにこすり落とし短冊状に切った後、一晚タレに付け込んだもので、「のうさば」には延縄にかかったサメをおいしく食すために考えた先人たちの知恵と工夫が詰まっている。12月には、この「のうさば」を干す姿が地区のいたるところでみられ冬の風物詩となっている。



のうさば



年間を通じ飾られている注連縄

#### （４）恵比寿信仰

##### ア 恵比寿神社

宗像の浦々には海の石を御神体とする小さな祠が点在している。恵比寿神は漁民の間では漁業神としての性格があり、豊漁や漁の安全を願い信仰の対象としてきた。

鐘崎地区では、昭和9年（1934）以降、大規模な埋立てを行って港湾整備が行われてきたが、地区内の恵比寿神社は区（京泊・千代川・北町・中町・西町）ごとであり、整備以前の旧海岸線に沿って海に向かって位置していることから、各恵比寿神社は港湾整備のされる昭和9年以前から存在していた。また、大島西区の蛭子神社の祠には大正6年（1917）建立の文字が刻まれている。それぞれの神社はそれぞれの区によって長年管理され地元根付いてきた。

宗像郡神社明細帳（明治6年（1873））には鐘崎地区のほか、地島地区にも恵比寿神社の記載があって現存しており、このほか、大島地区や神湊地区の浦々にも恵比寿神社が残っている。





鐘崎地区 西町区の恵比寿神社



鐘崎地区 中町区の恵比寿神社



鐘崎地区 千代川区の恵比寿神社



鐘崎地区 京泊区の恵比寿神社



鐘崎地区 北町区の恵比寿神社



神湊地区 中町区の恵比寿神社



神湊地区 上中区の蛭子神社



大島 西区の蛭子神社



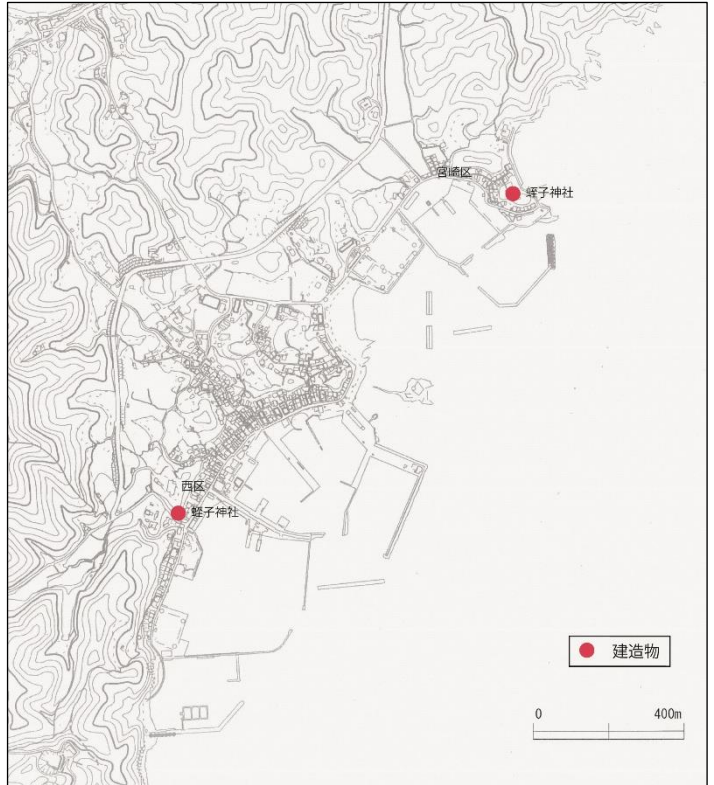
地島 豊岡区の恵比寿神社



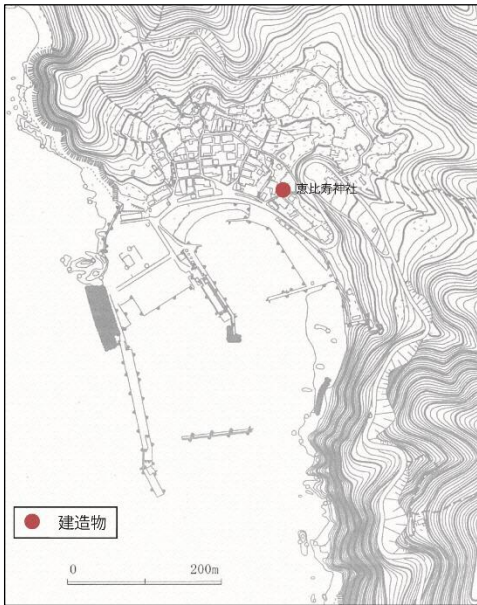
大島 宮崎区の蛭子神社



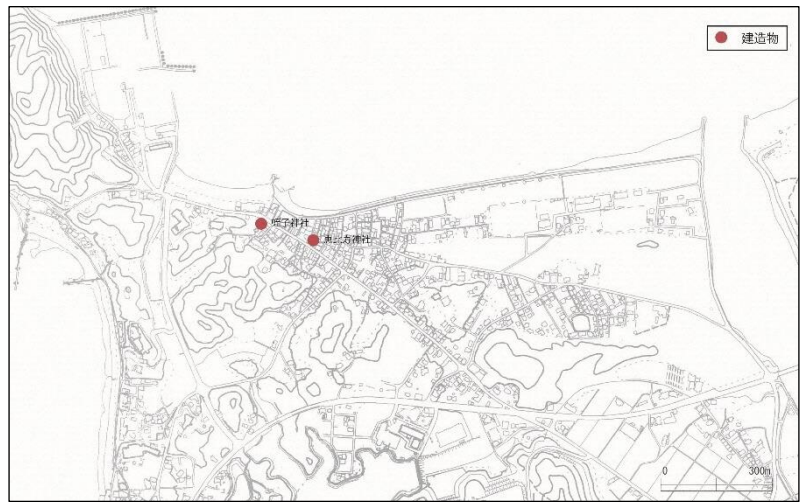
織幡神社と恵比寿神社(鎌倉地区)



蛭子神社(大島)



恵比寿神社(地島)



恵比寿神社(神湊地区)

## イ 恵比寿信仰のかたち

宗像の浦々にある恵比寿神社には、日常的にお参りや草取りなどの清掃活動、水替えや賽銭箱の管理、晴れの日にはお供えを行うなど、生活の中に恵比寿信仰があり、海で暮らす人々の生活に溶け込んできた。これから紹介する活動については、民俗資料緊急調査の報告にみることができ、古くからの信仰と活動が今も続けられている。

鐘崎地区の織幡宮の入口に位置する京泊区の恵比寿神社では、願い事をする時に参詣者は賽銭箱の上にある棒で箱をたたく慣習がある。これは恵比寿神は耳が遠いと言われていることに由来するもので、木造船が主流だった時代は、鐘崎地区では出漁の際、船が恵比寿神社の前に差しかかると船のカンヅカ（梶棒）で「フナバリ」（舷側）を叩き「トウエビス」と叫び、恵比寿神に豊漁と安全を祈願していた。現在は、参拝時に男性漁師の奥さんが「トウエビス」と叫びながら「いい漁がありますように、怪我がありませんように」と恵比寿神社の賽銭箱の前に掛けられた棒を叩いている。また、恵比寿のツキにあやかるため、漁船の船名に「恵比寿丸」とつけられたものも多く、漁業に従事する人々の恵比寿信仰の現れのひとつといえ、このほかに「蛭子丸」「夷丸」をつけた船もみることができる。

また、現在、鐘崎地区や大島、地島では、毎年12月3日前後になると、大漁満足、海上安全、家内安全、商売繁盛などを祈り恵比寿祭を行っている。鐘崎地区では、12月3日に漁協が主催し宗像漁協本所で恵比寿祭を行う。これはもともと鐘崎地区で50年程前まで「えべつさま」と呼ばれ、毎年12月3日に各地区の恵比寿神社で行っていたもので、現在の恵比寿祭も以前と変わらない日付で行っている。

現在の鐘崎地区の恵比寿祭は、お座形式で行い、参加者は事前にお座券を購入して参加する。

恵比寿祭の準備は前日から行う。世話人や漁を引退した年配者を中心に、会場準備やお座料理の仕込み、お座参加者に授与される笹を採ってくる。

漁師町の朝は早い。恵比寿祭当日、紅白幕が掛けられた漁協の会場では、早朝から1番座が始まる。会場の恵比寿様が祀られた社には、神饌のほか、献魚がお供えされている。鐘崎地区の恵比寿祭は25名程度を1座とし、午前5時から午前9時まで1時間ごとに5番座までがあって、毎年100名以上が参加する。参加者は、早朝は出漁前の男性漁師が多く、次第に女性や子供の姿が多くなる。



賽銭箱の上に置かれた棒



恵比寿祭の会場



献魚

まず、会場に到着した参加者は会場横の待合室に通される。待合室には酒、スルメ、コンブ、イリコ（煮干し）が置かれ、ここで参加者は座が開始されるまでの時間を過ごす。そこには参加者たちが早朝から酒を交わす姿があって、和やかな空気が漂っている。

参加者は着座の際に福引で使用する番号札を引く。この札には4の数字がなく、縁起を大切にしている。お座では一座ごとに織幡神社宮司が太鼓を打ち込みおおほらえことば大祓詞を奏上し祝詞を読み上げる。祭典の流れは1番座から5番座まですべて同じで省略はない。そこには、正座のうへ、真剣な表情で恵比寿祭に臨む漁師をはじめとする参加者の姿があって、漁師町ならではの恵比寿様に対する篤い信仰心を感じる。

30分ほどの祭典を終えると、恵比寿様の面を被った世話人が手一本の打ち込みを行い、福引や食事の振る舞いがある。福引では、番号札が引かれ、事前に引いた番号と同じ番号の参加者に縁起物が授与される。くじが引かれる度に会場では歓声が上がり、縁起物を授与された参加者には笑顔があふれる。授与される縁起物には、金色の恵比寿様の像や御幣があり縁起を感じさせる。また、福引とは別に、参加者には全員、竹笹と恵比寿神社の御札のほか小鯛、紅白餅、紅白の蒲鉾の切り身、結び昆布、小豆を炊き込んだ豆ご飯の入った縁起物の袋が授与される。この縁起物の袋は、持ち帰った後、神棚にお供えされる。その後、これらの縁起物は家族で少しずつ分け合って食べると言い、ここにも縁起を大切にする姿がある。またこの日は、各地区の恵比寿様にも金色の恵比寿様の像がお供えされる。

祭典後の食事では、鰯や鮪の刺身・大根・人参・鰯の切り身を和えた紅白なます、アラの味噌汁、小豆を炊き込んだ豆ご飯、お神酒が振る舞われる。これらには、漁師町ならではの華やかさがあり縁起の良さを感じさせる。食事の後は、恵比寿様から福をいただき新たな気持ちで漁に向かう漁師や縁起ものを片手に家路に向かう人々の姿があって、漁師町には欠かせない祭事となっている。



番号札と福引のくじ



縁起物が入った袋



鐘崎地区の恵比寿祭



授与される縁起物と竹笹、料理の振る舞い

## (5) <sup>おりはた</sup>織幡神社春季大祭

### ア 織幡神社

織幡神社は鐘崎地区の最も北にある佐屋形山に位置する地区の氏神で、宗像大社の境外摂社であり、地元では「シキハン様」と呼ばれ親しまれている。また、佐屋形山のある岬は「鐘の岬」と呼ばれ万葉集などの多くの歌に詠まれた名所である。織幡神社は延長5年(927)にまとめられた朝廷の年中儀式や制度を定めた「延喜式」にみられる式内社で、宗像郡内では宗像大社と織幡神社の2社であったことから、宗像大社に次いで格式の高い神社だった。

御祭神は武内大臣<sup>たけのうちのすくね</sup>、志賀大神、住吉大神、天照大神、宗像大神、八幡大神である。主祭神は武内大臣<sup>たけのうちのすくね</sup>(武内宿禰)で神宮皇后を助け三韓征伐を行った武人で、武内大臣は歴代天皇にお仕えし、寿命が尽きる時、鐘崎に戻ってこられ、この地に鎮座されたとされる。15世紀中頃に成立した『宗像大菩薩御縁起』によると、社名は、神宮皇后が三韓征伐の際に、宗像大社の神様が「御長手<sup>みながて</sup>」という旗竿につけた赤白の幡を武内宿禰が織ったことに由来するとされる。社殿は3間社流造、銅板葺の構造で、境内には明治24年(1889)の改築時の石碑が残っている。

### イ 織幡神社春季大祭

織幡神社で毎年4月16日に漁の安全と大漁を願って行われる春季大祭は、漁師たちの漁に対する思いが詰まった祭事である。この祭事は明治3年(1870)の神社帳に恒例祭として記載があるもので、100年以上の歴史がある。春季大祭ではお座が開かれ、遠方からの参加も含め例年200人程度が参加する。お座には鐘崎地区らしく漁業関係者の参加が多い。まだ辺りは暗闇の午前3時前から会場や料理など参拝者を迎えるための準備が進められる。午前4時半には当番区の神事があり、毎年、当番は鐘崎の6つの区が交代で受け持つ。お座に参加するには奉納金が必要だが金額は定められていない。名前と共に修めた金額が半紙に書かれ、境内の掲示板に貼り出される仕組みになっている。



織幡神社本殿



お座



奉納金の額と奉納者の名前が張り出される掲示板

午前5時から太鼓が鳴らされ音楽が鳴り響く中、本殿で参拝を終えた参加者たちは本殿下の会館でお座に参加する。お座では刺身などの海の幸を使った漁師町らしい食事の振る舞いがある。参加者たちは食事の際にくじ引きをし、宝船や福俵、熊手などが授与される。また、お座の参加者には「織幡神社 春季大祭」「大漁安全交通安全」「商売繁盛富貴長名」の札がつけられた熊笹が授与される。授与される熊笹は、毎年鐘崎地区の中原区で採られることになっている。夜が明けると神社近くのバス通りから参道の途中までの約 200mに渡り、大漁旗や船の名前と



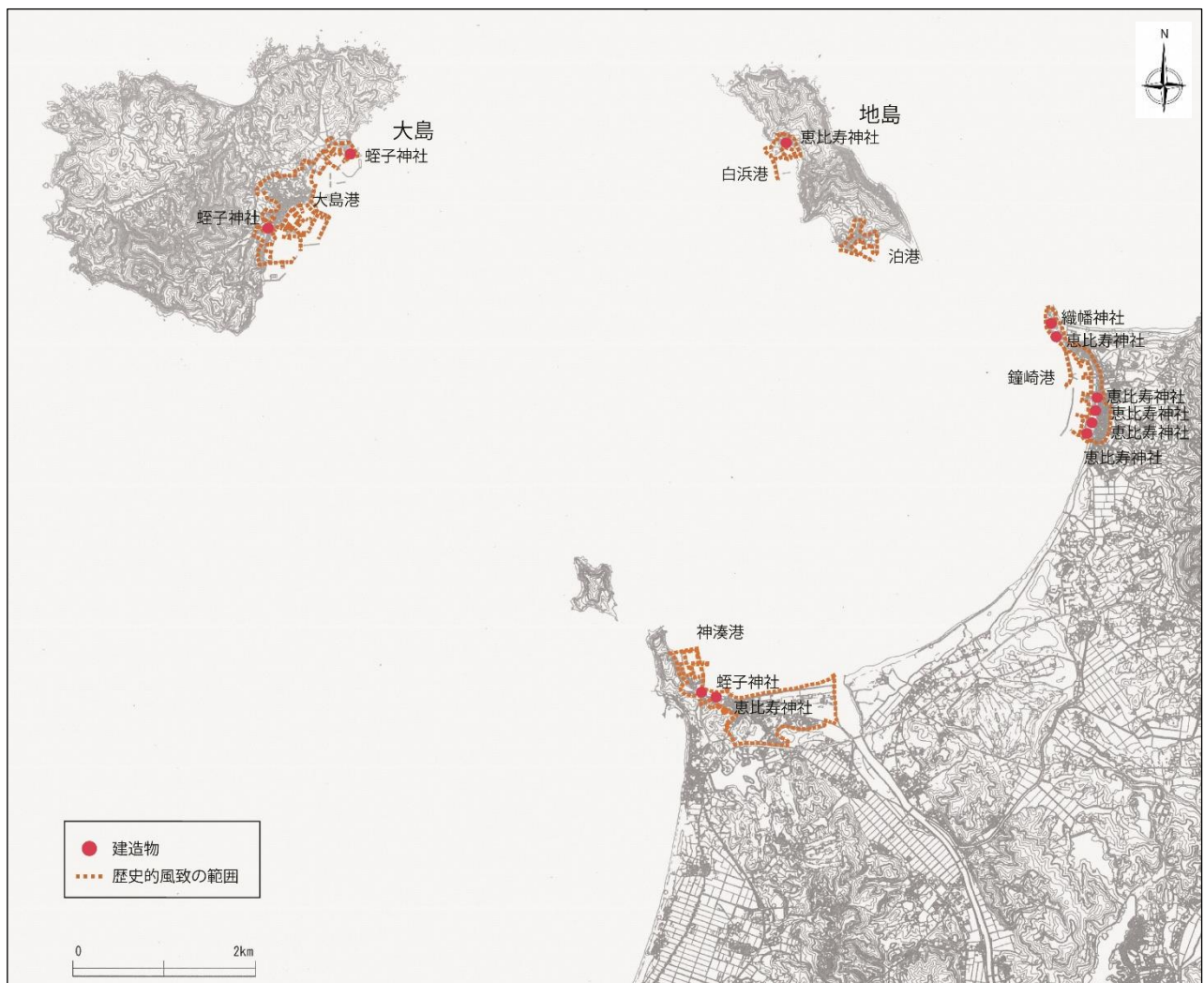
境内の参道に立てられた幟

奉納者の名前が書かれた幟がずらりと立ち並んだ光景が広がる。幟は春季大祭のために奉納にされたもので、数多くの色々の幟から、この春季大祭に臨む漁業関係者の祭事を大切にしたいという気持ちがよく伝わる。また、織幡神社のお座は祭典を省略しないため、一番一番が長い。そこには神様の御利益を十分受けたという漁師たちの熱い気持ちが現れている。お座が終了し、春季大祭の神事が始まる頃には時計の針は午前 11 時を指している。神事では、宮司による祝詞奏上の後、20 名以上が玉串を捧げた後、春季大祭は終了する。

## (6) まとめ

本市の神湊、鐘崎、大島、地島の人々は、長い間、身近に存在する海を中心にした生活をしてきた。長い歴史の中、沿岸部の人々が海と共に暮らしてきた痕跡は縄文時代の鐘崎（上八）貝塚や古墳時代の浜宮貝塚などにみることができる。江戸時代には沿岸部の集落は宗像七浦と呼ばれ、漁業が盛んで大島では鯨漁も行われていた。また、鐘崎地区は日本海沿岸の海女発祥の地のひとつとも言われ海女漁も盛んだった。現在もこれらの地区では漁業が盛んで、鐘崎地区の魚の水揚量は福岡県内でも有数であり、長く続いてきた漁業を絶やしてはならないと、後継者育成にも力を注いでいる。

漁村集落の街並みと信仰に関わる祠や神社と信仰による活動の一体性は、海に暮らす人々の海からの恵みに対する感謝と畏敬の念が如実に表れた地域独自の歴史的風致であり、後世に引き継ぐべきものである。



宗像の浦々にみる歴史的風致の範囲

### 3. <sup>はっしょくう</sup>八所宮の御神幸祭にみる歴史的風致

#### (1) はじめに

本市南東部の最も内陸に位置する吉武地区は、西は市の中心市街地に向かって開け、北東南の3方を山々に囲まれている。地区の中央にはその南西にある倉久山付近<sup>くらひさやま</sup>を源流とし、東西に本市を貫流する釣川が流れ、周囲には田園風景が広がり、農村集落が形成されている。

江戸時代には、唐津街道から分岐した赤間往還が吉武地区を通過して、北九州の木屋瀬へ向かっており、現在も旧街道沿いで近世の町家が建ち並ぶ姿をみることができる。このため、当時の人々は、街道を通る最新の文化や情報に触れることも多く、さらに、幕末には勤皇の志士である早川勇<sup>はやかわいさむ</sup>を輩出することとなった。

この地区にある八所神社は、地元で八所宮と呼ばれ、崇敬され親しまれてきた神社である。この神社で毎年10月の2日間に渡って行われる秋季大祭は、この地域が一年で最も活気にあふれる祭事であり、中でも1日目の夜から2日目の深夜にかけて行われる御神幸祭には、300年以上の伝統とともに準備の段階から神社と人々が一体となって活動する姿がある。

#### (2) 八所宮

八所宮は吉留地区<sup>よしどめ</sup>の宮ノ尾<sup>みやのお</sup>に位置し、江戸時代には周辺の旧11ヶ村（吉留村・武丸村・富地原村・名残村・徳重村・石丸村・赤間村・陵巖寺村・三郎丸村・田久村・上畑<sup>いしまる あかま りょうげんじ さぶろうまる たく じょうばた</sup>（現在の遠賀郡岡垣町）の総鎮守として大切にされてきた。現在は吉留地区と武丸地区を合わせた吉武地区の総鎮守となっている。

元禄16年（1703）『筑前国続風土記拾遺』には、由緒についての記載があり、神武天皇が東征の時、遠賀郡の岡湊<sup>おかのみなと</sup>に馬を止め、鳶岳<sup>つたがたけ</sup>に立ち寄った際、八所宮の神様が赤馬に乗って現れ、永くこの地の守護神となることを誓ったことに由来すると言われ、その場所を赤馬と名付けたという。現在は、赤馬を赤間と表記し、吉武地区の西側に隣接する地区の名称になっている。また、神社の位置する吉留の呼称は、八所宮の神様は清浄なる地に鎮座されたので、吉き所に留められたことから吉留<sup>よ</sup>という言い伝えられている。神社には伊弉諾尊<sup>いざなぎのみこと</sup>・伊弉冉尊<sup>いざなみのみこと</sup>・泥土煮尊<sup>ういじにのみこと</sup>・沙土煮尊<sup>すいじにのみこと</sup>・大戸道尊<sup>おおとのじのみこと</sup>・大戸邊尊<sup>おおとのべのみこと</sup>・面足尊<sup>おもたるのみこと</sup>・惶根尊<sup>かしこねのみこと</sup>の四組八柱の神が祀られている。

社殿の造営記録については、江戸時代直前の慶長年間の記録が残っているが、現存する本殿は三間社流造、銅板葺の構造で江戸時代後期の特徴があり、18世紀中頃のものと考えられる。また、過去の境内の様子は明治31年（1898）の『大日本名所図録』内に収録されており、土塀や石垣、本殿



八所宮本殿



八所宮拝殿



左右の翼廊や舞台などが描かれ、現在も当時の建物が境内に残されている。そのほか、境内には崇敬者から奉納された江戸時代以降の灯籠などの石造品も多く、神社は地域に大切にされてきた。また、大正時代には地元を挙げて社格の昇格運動が行われ、その結果、昭和9年（1934）には村社から県社へ昇格した。

現在、本殿及び拝殿、土塀および石垣、鳥居が市指定有形文化財に、イチイガシ、トキワガキを主体とする八所宮の社叢しゃそうは福岡県の天然記念物に指定されている。

### （3）八所宮周辺の市街地

吉武地区では稲作を中心とした農家が盛んであるため、農家住宅が多く、その住宅にはそれぞれ主屋・納屋・倉・隠居屋があつて、主屋の前庭を囲むように建物が配置されている。集落の後背には自然豊かな山々と前面には水田地帯が広がり、そこには昔ながらの農村集落の姿がある。また、地区を横断する赤間街道沿いには、時代を感じさせる近代の町家がまとまって立ち並んでいる。

このほか、八所宮の御神幸行列沿いには、享保2年(1717年)創業と伝えられている酒蔵、伊豆本店があり、母屋や酒蔵、煙突などの時代を感じさせる建物等が立ち並んでいる。ここでつくられた清酒は八所宮や宗像大社のお神酒としても奉納され、参拝者に振る舞われている。また、毎年行われている蔵開きでは、酒蔵で槽搾りと呼ばれる昔ながらの酒搾りが公開され、屋外には酒まんじゅうの蒸気と甘い香りが漂っており、地区内外からの多くの来訪者で賑わっている。なお、毎年の御神幸行列で八所宮の神様がお乗りになる御神輿は、江戸期にこの伊豆酒造から奉納されたものである。



赤間街道沿線の町家



稲作を中心とした農家住宅の多い吉武地区

#### (4) 御神幸祭の歴史

御神幸祭は御神体の御霊が神輿などにお乗りになって、行列と共に里にお下りになり、八所宮の神様が人々の暮らしをご覧になる祭である。神前には地元の米や野菜が供えられ、人々は五穀豊穡と無病息災を願う。吉武地区の年長者は「子どもの頃、お祭りの日は学校も休みになり、わくわくしながら硬貨を握りしめて八所宮へ行ったものだ」と語るが、この気持ちは現在の子どもたちも同じである。

19世紀はじめに編纂された『筑前国続風土記附録』によると、八所宮の御神幸祭は享保年間（1716～1735）には行われていたとされ300年以上の伝統を持つ。江戸時代、御神幸祭は旧暦の9月18日に行われていたが、現在は、10月の第三土曜から日曜の深夜にかけて行われ、二日目には氏子奉幣五穀豊穡祈願祭、弓道大会や子ども相撲大会などが奉納されており、2日間を通じ神社には多くの参拝者が訪れる。

御神幸行列は奏楽・獅子頭・獅子楽・神輿の行列に鉄砲・弓・刀・白羽熊・挟箱などを持った大名行列が加わる形をとる。行列は総勢200名余りの氏子で構成され、役割は伝統的に地区ごとに決められている。また、大名行列は、その昔、疫病が流行った際に、猿田・平山・松丸地区の人々が願い出たことによって始まったと言われている。なお、吉武地区に隣接する鞍手郡鞍手町の剣神社遷宮行列の中の名大行列は、明治時代になって八所宮を習って始まったとされ、鞍手町の無形民俗文化財に指定されている。

#### (5) 御神幸祭の準備

御神幸祭の準備は地区ごとに約2カ月前から進められる。御神幸行列中の獅子楽を担当する宮ノ尾地区や奏楽を担当する石井、石井原地区では平日の夜に地区の男性が公民館に集まり、笛や太鼓の練習を行う。毎年この時期になると、集落に響く笛や太鼓の音色によって地域住民は祭りが近づいたことを感じる。

大名行列を担当する猿田・平山・松丸地区では青年男性らによる「行列組」が組織されており、以前は数え年の44歳まで参加していた。現在、大名行列には代表や指導者である監督、小学校低学年から30歳前後の青年まで約50人が参加し、その役決めは、代表と監督、行列へ参加する30歳前後の年長者らが寄合によって行っている。また、行列の役割は年齢によって決まっていて、先頭の御鷹は年少者が、最後方の3役と呼ばれる草履取りと鉄箱は年長の青年が受け持っている。

なお、これまで大名行列への参加は伝統的に3地区の児童と青年に限られていたが、15年ほど前から担い手不足により吉武地区全体に参加者を募るようになった。参加者は親から子へ受け継がれてきた誇りを胸に毎年の大名行列に臨んでいる。



石井・石井原地区の奏楽練習



宮ノ尾地区の獅子楽練習

大名行列の練習は祭礼の2、3週間前から週末の昼間に八所宮で行われ、「地ならし」と呼ばれている。大名行列の動きには歩き方や手に持つ道具について代々決まりがあり、練習では監督や年長者たちが年下の者たちに自ら動きを交えながら、所作や心構えについて熱く指導する姿がある。練習が進むにつれ、指導される側の表情は次第に引き締まった顔に変化していく。練習の後には行列組の監督や青年たちは「テンプラ」をつまみに酒を酌み交わしながら反省会や当日の流れの確認を行い、本番に向けて意識を高めていく。この「テンプラ」は、こんにゃく、魚のすり身を揚げたものやちくわを大量の唐辛子で甘辛く煮込んだもので、毎年の反省会の名物になっている。練習の裏では味付けの指導もみられ、この味も行列と共に世代を超えて受け継がれている。

御神幸行列には行列の通る道筋に結界として張られしめなわた注連縄も欠かせない。吉武地区では毎年9月中旬に注連縄づくり保存会のメンバーら約40名で注連縄づくりを行っており、2日かかりで新たに大小さまざまな注連縄約40本がつくられる。以前は、吉武地区にある城南ヶ丘以外の8地区の持ち回りで注連縄づくりを行っていたが、人手不足などの理由から平成24年に保存会を結成し、吉武地区全体で注連縄づくりに取り組むようになった。注連縄に使うワラは前年に刈り込み、天日干しで乾燥させたもち米を使う。もち米のワラが他の品種より柔らかくて縄を編みやすいという。注連縄は完成後、すぐに張替えられ、八所宮や御神幸行列沿いは、新たに神聖な場所として生まれ変わり、神様を受け入れる準備が整う。

また、祭りの1週間前の午前8時、御神幸行列の通る道筋や境内には一斉に大きな幟を立てられる。この幟立ては、立てる場所が属している各地区が毎年行っており、早朝から集まった地区の人々は、力を合わせて次々と旗を立ててゆき、作業を終える頃には周囲にはより一層祭りの空気が漂ってくる。

## (6) 御神幸祭当日

御神幸祭の当日、境内には出店が立ち、夕方からは多くの参拝者で賑わう。境内には祭りを楽しみにしていた子供たちの姿も多い。境内の舞台では日暮れと共に地域の人々による演芸奉納が始まり、奉納が終わる



行列組による大名行列の「地ならし」



行列組の反省会で食される「テンプラ」



しめなわ  
注連縄づくりの様子



しめなわ  
注連縄の張替え作業

度に大きな拍手が鳴り響く。

午後8時、御神幸に先立ち八所宮の神様を御神輿にお移しする御霊移しの神事が行われる。神事には各地区から選出された八所宮の運営を行う奉斎会の役員や行列組の監督らが参加して、照明の明かりは消され、静けさの中に祓い清めのための「オー」<sup>けいひつ</sup>という警蹕の低い声が響き渡る中、宮司が八所宮の神様を3台の御神輿にお移しする。

午後10時になると、いよいよ御神幸が開始される。行列は本拝殿前の真っすぐな参道を抜け、集落を通り約1km離れた里の釣川にかかった朱塗りの御幸橋のたもとの御仮所まで行列するもので、「お下り」と呼ばれる。行列開始の5分前から打ち鳴らされる拍子木の音は次第に境内を厳粛な雰囲気へと変えていく。そして行列は大名行列を御神幸行列が挟む形で隊列を組んで本拝殿前から出発。境内には凜とした拍子木の音、御神幸行列の獅子楽の笛と太鼓の音、大名行列の青年男性が発する「エーイ、エーイ」の掛け声が響き渡り、独特の雰囲気を醸し出している。

行列は約1時間かけて御仮所まで行幸し、到着後、御仮所へ安置された三体の御神輿を囲んで神事がはじまる。神事では、お汐井取りが行われ、真夜の釣川の澄んだ清い水を汲んで神前にお供えする。深夜に御神幸祭が行われるのは、このお汐井取りを大切にしているからだともいわれている。

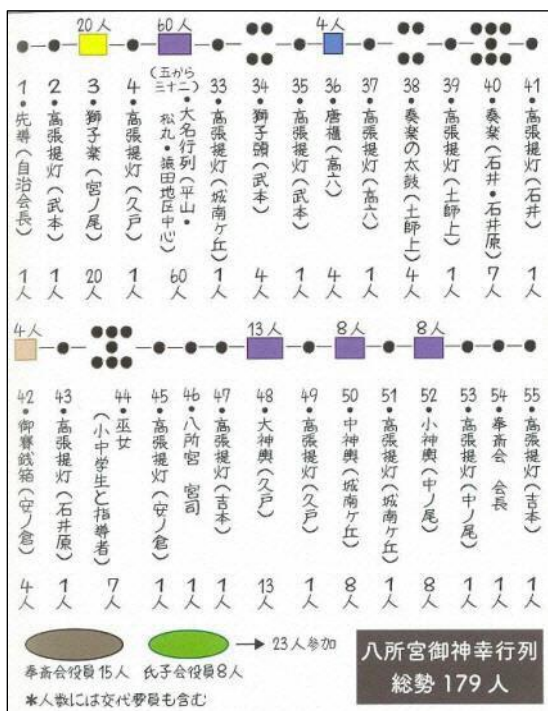
御仮所での神事が終わり、深夜0時を過ぎると、「お下り」と逆の行程で「お上り」が始まる。



御神幸行列の経路沿いに立てられる幟

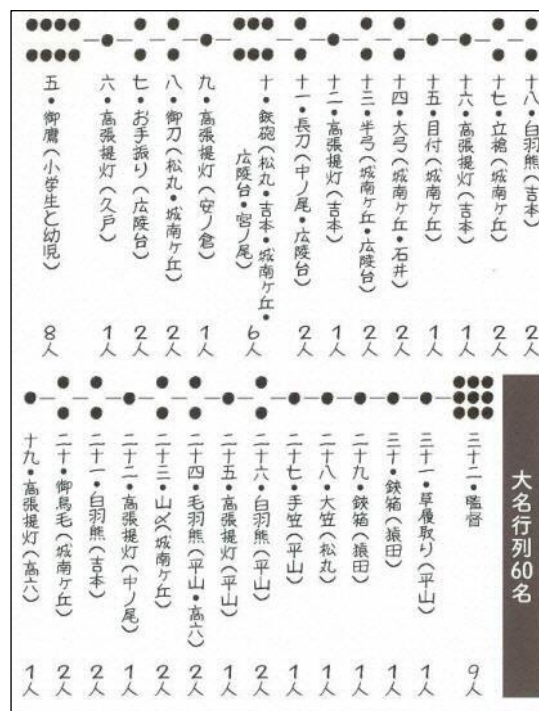


御霊移しの神事



御神幸行列隊列図(平成25年(2013))

平松秋子『八所宮のおくんち』平成26年(2014)より転載



大名行列隊列図(平成25年(2013))

平松秋子『八所宮のおくんち』平成26年(2014)より転載



御神幸行列



御神幸行列のなかの大名行列

八所宮の神様を乗せた御神輿は八所宮へお戻りになると、御霊戻しの神事をもって御神幸祭は終了する。本殿に行列が戻るころには深夜2時を過ぎている。

### (7) 御神幸祭の後

祭事後、拝殿では式典が行われ、子ども達による奉納相撲大会やお手玉大会が行われた後に終了する。御神幸祭終了後、行列組は、公民館に集まりこの地域で昔からよく食された鶏すきを囲んで反省会を行う。そこには鶏すきを囲みながら地域の伝統に誇りを持って毎年の祭事に臨み、次の世代に繋げて行こうとする青壮年たちが正面から積極的に祭事に向かい合う姿がある。

宗像地域では祝い事や来客の際、自分の家で飼っている鶏を使い料理するのが最高のもてなしとされてきた。この地域で鶏すきが食されてきた理由は諸説あるが、一説には、宗像に鉄道が開通した明治時代、「宗像卵」と呼ばれ関西などの都市圏へ向け鶏卵を盛んに流通させていた頃に始まったとも言われている。



鶏すき

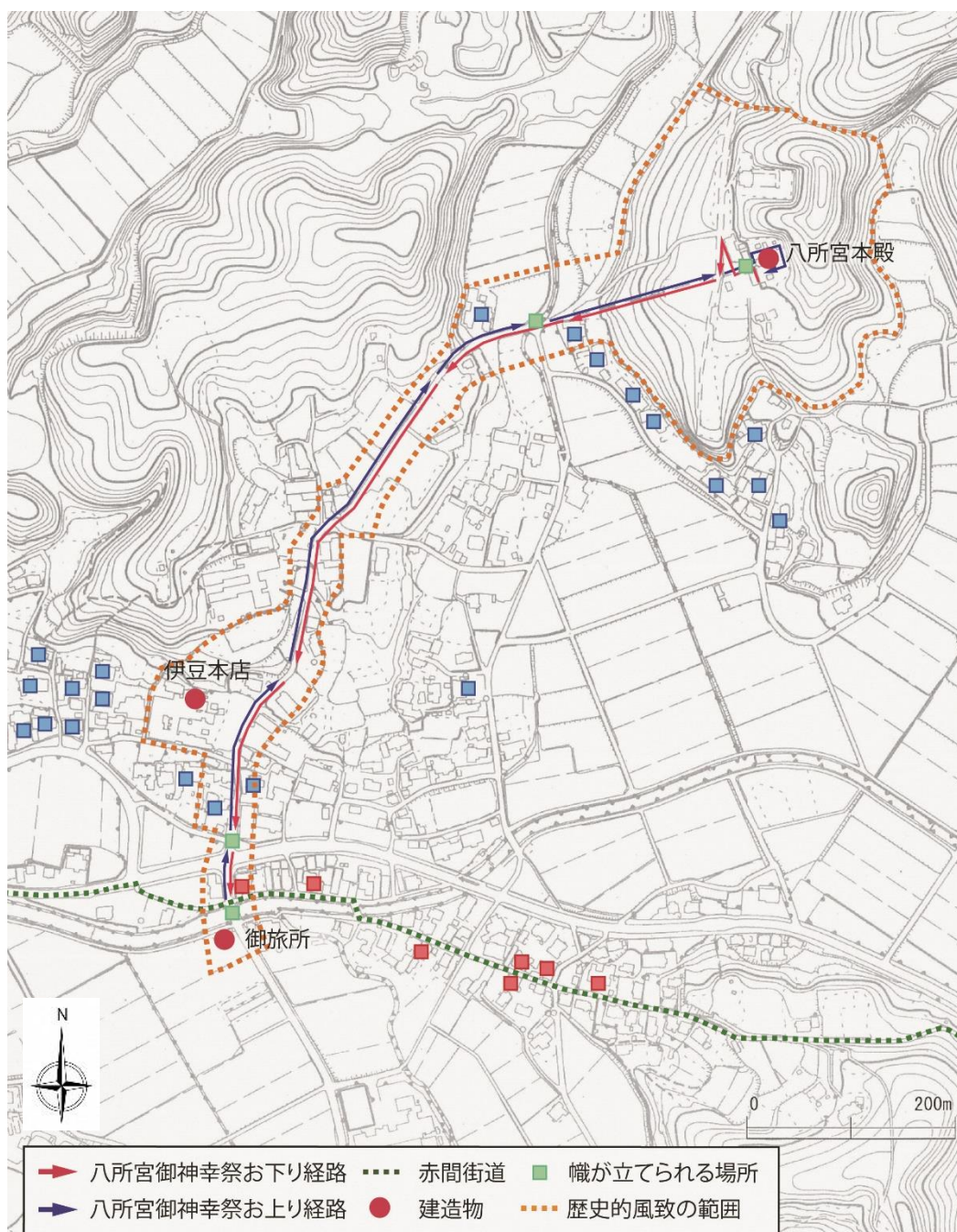
### (8) まとめ

江戸時代に旧十一ヶ村の総鎮守だった八所神社は、八所宮の名で親しまれた、現在も吉武地区を中心に信仰されている神社である。境内には、本殿・拝殿や土塀・石垣などの歴史的建造物が残されている。

八所宮の周囲には田園風景と農村集落、赤間街道沿いには街道の面影を残すまちなみが広がっており、八所宮を中心に良好な景観が形成されている。300年以上の伝統を誇る御神幸祭は、準備の段階から八所宮とその周辺地域の人々が一体となり、毎年の里の恵みに感謝し五穀豊穡を祈る姿であって、良好な歴史的風致が形成されている。



拍子木の音に合わせて空高く突き上げられる大名行列の白羽熊



八所宮の御神幸祭にみる歴史的風致の範囲

## 4. 唐津街道赤間宿にみる歴史的風致

### (1) はじめに

江戸時代、筑前小倉（北九州市）から玄界灘沿岸を通り、肥前唐津（佐賀県唐津市）を結ぶ唐津街道は、北部九州の交通と物流の大動脈として整備された。玄界灘沿岸の民衆が社寺参詣などで使用するだけでなく、福岡城から小倉へ至る道は福岡藩主が江戸への参勤交代の道として、福岡城から唐津方面へは、当時外国との窓口であった長崎警備のために通行する道として重要な役割を果たした。

市の東部に位置し、唐津街道が縦断する赤間地区は江戸時代に宿場町として整備され、以降も人や物資の集積地として大きく賑わった。現在も街道沿いには、街道に面する間口が狭いウナギの寝床と言われる奥に長い町家の区画が残され、古いまちなみが形成されている。街道沿いの軒を低くし、2階の窓を小さくした漆喰の白壁に瓦屋根の家々は、その外観から「兎造り」と呼ばれ、歴史を感じさせる。通りを歩き進むと、北に城山が見える。この風景は昔から変わらず、ここでは時代の息吹きが感じられる。

赤間地区では、街道の宿場町として栄えた時代から続けられてきた酒造をはじめとする生業や、賑やかだった時代から守り伝えられてきた祭事などの伝統が今も受け継がれている。



現在の赤間宿



赤間宿のまちなみ

### (2) 唐津街道の歴史

本市は太宰府や博多から近畿に向かう交通の要衝にあり、古代から近世にかけて道や駅が整備されてきた。本市に見る最も古い道は、古代の官道で平安時代中期の「延喜式」にも記されている。この道は遠の朝廷大宰府から現在の遠賀郡まで至るのであった。駅家は古代官道の整備によって設置された人や物資の世話をを行う施設である。市内には津日駅と嶋門駅の間つひしまとに駅があり、大同2年(807)までに名所不明の駅があったとされる。その比定地は定かになってはいないが、宗像大社辺津宮付



唐津街道(国土地理院地図を加工)

近や、沿岸部の鐘崎地区、赤間地区にほど近い吉武地区武丸が候補として考えられている。吉武地区の武丸大上げ遺跡からは、奈良時代の瓦や大型掘立柱建物が発見されている。福岡と北九州の境目にある城山の麓に位置するこの遺跡は、峠の入り口にあることから、交通の要衝に整備された駅とも考えられている。

また、中国の歴史書『三国志』の「魏志」倭人伝に記された末廬国と伊都国を通り奴国を結ぶ道と古代官道は唐津街道の前身と考えられる。この道は戦国時代に豊臣秀吉の九州平定や文禄・慶長の役のための軍事的な道として利用され、太閤道と呼ばれた。唐津街道もその道を基本に整備され、沿線には太閤にまつわる「太閤橋」や「太閤井戸」が残されている。

唐津街道は、豊前小倉の常盤橋を起点として若松（北九州市）－芦屋（遠賀郡）－赤間（宗像市）－畦町（福津市）－青柳（古賀市）－箱崎（福岡市）－博多－姪浜（福岡市）－前原（糸島市）－深江

（糸島市）を通るものだったが、明和年間（1768～1772）には、小倉－黒崎（北九州市）－木屋瀬（北九州市）と長崎街道を通り、木屋瀬から西へ分岐して遠賀川を通り赤間へと至る道（赤間往還）が多く利用されるようになった。



市内の唐津街道ルート(国土地理院地図を加工)

### (3) 赤間宿の歴史

市の東部に位置する赤間地区は、江戸時代に福岡藩が整備した27の宿場町のうちのひとつ、赤間宿があった場所で、多くの人や物が往来し賑わった。赤間は若松・芦屋方面に向かう街道と木屋瀬へ向かう赤間往還の分岐点にあり、赤間と木屋瀬の途中からは福岡藩主の別館がある底井野へ向かう底井野往還も分岐していたことから、交通の要衝として栄えた。

また、赤間宿は芦屋・波津・鐘崎・神湊・勝浦・津屋崎・福岡の七浦から三里の場所にあることから「七浦三里」と言われ、商業・物流の中心として

も発展した。文化10年（1813）に赤間往還測量の折に赤間宿を訪れた伊能忠敬は「町並人家続き、家百五十六件」と『測量日記』の中で記している。また、19世紀初めに筑前の名所・風景を解説した奥村玉蘭の『筑前名所図会』にも多くの町家が描かれており、当時の賑わいぶりがよくわかる。

赤間宿の福岡方面から赤間宿へいたる場所には構口がある。構口は『筑前名所図会』にも描かれている。現在、その地点は「構口」という名称の交差点となり、当時の名残をとどめている。町筋は南北に緩やかに傾斜し、町茶屋、問屋場、旅籠、商家が立ち並んでいた。また、街道に面して往来する人々の喉を潤すため7つの辻井戸が掘られていた。宿場町の北側には法然寺と須賀神社があり、通りの中ほど



七浦三里(国土地理院地図を加工)

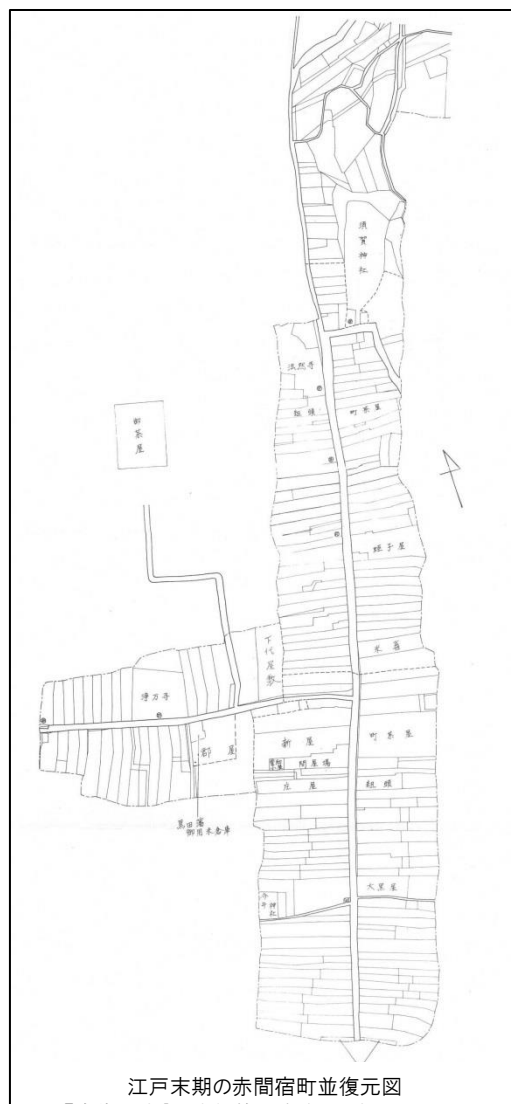


には西側に本町があった。本町には郡内村役人の集会所の郡屋や宿場役人の下代屋敷のほか、福岡藩御用米蔵などの公的施設が設けられ、現在の城山中学校グラウンドには、福岡藩二代藩主の福岡忠之の時代に藩主の休憩、宿泊のための御茶屋が設けられ、その姿は「赤間宿御茶屋絵図」（林家文書）に描かれている。また、赤間宿は動乱の幕末期、慶応元年（1865）に、都落ちした三条実美ら五卿が、太宰府へ向かう途中に一月程滞在したと伝えられており、法然寺横には「五卿西遷之碑」が残されている。

明治時代になると、赤間宿は最盛を振るった筑豊地域の炭鉱業の恩恵を受け、一带は江戸時代に引き続き賑わった。明治初期には、学校や警察署、郡役所など多くの公共施設が建てられ、宗像の中心地としての機能を果たした。当時は、様々な商店が軒を連ね多くの物資が集まっていたことから「赤間へ行けば花嫁道具が全部揃う」と言われるほどだった。



赤間驛の図 『筑前名所図会』



江戸末期の赤間宿町並復元図  
『宗像市史』通史編第2巻古代・中世・近世を一部修正

#### （４）赤間宿の歴史的建造物

##### ア 出光佐三生家 国登録有形文化財（建造物）

赤間宿沿に東面する町家で、出光興産創始者出光佐三の生家。明治時代に賑わっていた頃の赤間宿の繁栄ぶりを物語る建物である。建物北側の棟を高く、南側の棟を一段低くする特徴的な構造で、屋根は棧瓦で葺く。外壁は漆喰で仕上げ、2階の窓には鉄格子をはめて重厚な造りとなっている。

出光家は代々染物業を営んでいたが、藍染めに使用する藍玉の卸商に転業、これを機に家屋が手狭となったため、明治26年(1893)に現在の建物を建築した記録が『出光家・松寿・千代』(昭和54年 出光興産)に残されている。出光佐三は明治18年(1885)に生まれ、幼少期を赤間で過ごし、明治42年(1909)に神戸高等商業学校を卒業、明治44年(1911)に現在の北九州市門司区で石油製品(主に機械油)を取り扱う出光商会を設立した。戦前は、石油の販路を東アジアに広げ、昭和15年(1940)に出光興産株式会社を設立した。戦後、石油業界に復帰し、石油の輸入・精製・販売の一環体制を整え、その後の会社発展に大きく貢献した。氏は晩年、宗像神社復興期成会を結成し、疲弊した宗像大社の復興に尽力した。また、幼少期に生まれ育った赤間の発展にも尽力し、赤間小学校への寄付や福岡教育大学の誘致などを行った。



出光佐三生家

#### イ 勝屋酒造店舗兼主屋 国登録有形文化財(建造物)

唐津街道赤間宿沿に東面する酒造業を営む勝屋酒造の店舗兼主屋。国登録有形文化財申請時の調査により建築構造や使用されている材料と意匠から、明治初期から中期にかけて建築されたとの所見が得られている。敷地をいっぱいを利用して、店舗・主屋・酒蔵が建てられており、現在も利用されている。屋根を棧瓦で葺き、外壁は漆喰で仕上げ、1階左手に格子をはめ、2階に格子窓を2つ設けて外壁の隅部を化粧の切石で飾るなど、通りを意識した外観となっている。勝屋酒造は、寛政2年(1790)創業と伝えられ、現在の当主は7代目である。



勝屋酒造

#### ウ 須賀神社

唐津街道と赤間街道が分岐する赤間宿の東端に位置する。赤間宿に住む人々の氏神様のひとつで、地元では通称祇園さんとして親しまれており、素戔鳴神すさのをのかみと事代主神ぬしのかみが祀られている。儒学者の貝原益軒によって編纂され元禄16年(1703)に藩主に献上された『筑前国統風土記』には、須賀神社は石丸地区に所在する七社神社ななやしろから遷したとの記録がある。昭和3年(1928)に村社になった。本殿は大正年間に再建されたものである。境内裏には、水神社、貴船神社、大神社、菅原神社、恵比寿神社、須賀神社が境内社として祀られている。昭和17年(1942)の神社帳にこれら境内社の記載があり、赤間宿の各区から遷されてきたものとされる。このほか、境内には江戸時代に掘られた辻井戸や明



須賀神社

治時代の鳥居があって時代を感じさせる。ここでは、毎年7月に祇園祭と12月に赤間ゑびす座が行われている。

## エ その他の歴史的建造物

その他、赤間宿には明治時代の町家や、猿田彦神社、今井神社、金毘羅社、大国主社、青木神社などの神社、法然寺や浄万寺といった寺院などがあり、唐津街道の宿場町として栄えていた頃の様子を伝える歴史的建造物が数多く残されている。そこでは、江戸時代からの祭りや信仰が連綿と続けられている。



今井神社



猿田彦神社

## (5) 赤間宿における生業・祭事

### ア 酒造り

赤間宿は城山の麓にあり、良質な水に恵まれた場所に立地している。宿場内には、共同の井戸である7つの辻井戸が掘られていたが、その中の須賀神社境内、浄万寺境内下ノ番田町入口の井戸は昭和30年代まで辻井戸として機能していた。

赤間宿の中心付近に位置する勝屋酒造は良質な水を利用した蔵元で山本善市が勝屋の屋号を名乗り、寛政2年(1790)に操業したと伝えられる。4代目の山本弥五郎が当主であった明治6年(1873)、筑前竹槍一揆で酒蔵が被害にあい、唯一、一時酒造りを中断せざるを得ない状況があった。しかしその後、酒造りを再開し、現在まで受け継がれ、現在の当主で7代目となっている。明治5年(1872)に刊行された『福岡県地理全誌』には、赤間で酒造りを行っていた3つの蔵のひとつとして記載をみることができる。また、勝屋酒造の「櫛の露」の銘柄は、宗像大社辺津宮境内に植えられた御神木「櫛ノ木」を由来とするもので、宗像大社の神酒として参拝客に振舞われている。「櫛ノ木」の傍らにひっそりと建てられた永代献酒の誓碑は、宗像大社への信仰の篤さを物語っている。このほか宗像大社にちなみ、大島の中津宮の神水で仕込まれた「沖ノ島」の銘柄も有名である。



宗像大社辺津宮の御神木の傍らに立てられた  
永代献酒の碑

酒造りは、毎年10月中旬頃から仕込みが始まり、12月半ばには新酒が完成しはじめる。酒造りには水が重要で、勝屋酒造では、敷地内にある酒造りに適した2つの井戸の水が使用される。このうちの1つは創業以来使われている素掘りの井戸である。杜氏たちは良い酒をつくるために、仕込み中は麹やもろみの温度を0.1度の単位で調整しながら酒造りを進める。毎年2月の第4日曜日にある蔵開きでは、新酒が振る舞われ、酒蔵は新酒を待ちに待った多くの人々であふれる。また、近年では、蔵開きに合わせて赤間宿まつりが開催され、街道沿いに多くの出店が並ぶ。この日の赤間宿一带は身動きが取れないほど歩行者であふれる。



## イ 赤間祇園祭

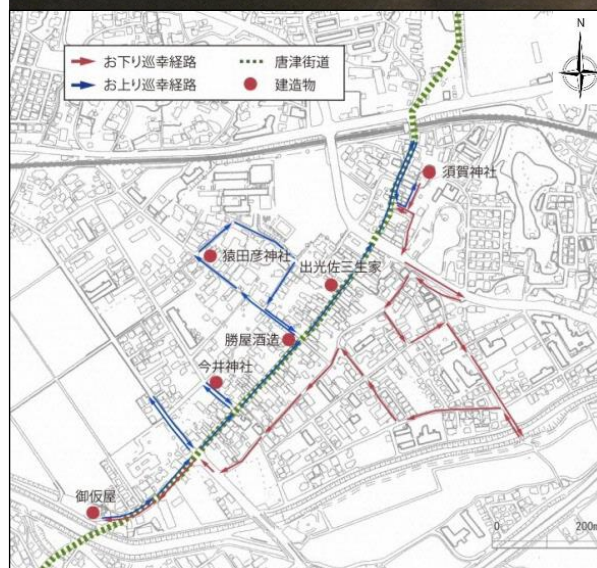
赤間祇園祭は須賀神社の神様が赤間宿の中を行幸される祭事で、約400年の歴史を持ち地域の人々が「疫病退散・家内安全」を祈る大切な伝統行事となっている。昭和20年(1945)に刊行された『福岡県神社誌』には、赤間祇園祭について「毎年7月14日より15日夕に涉り神幸式あり、所謂赤間祇園祭なり。赤間区内より選ばれし青壯年前日来潔斎をなし神心一体となり、素戔鳴神の荒び給う形相をなし荒々しき事かぎりなし、然れ共一人の負傷者をも出さざるは実に不思議の感を起こさしむ。また、茅の輪を作り大鳥居に張り、神輿を先頭に一同之をくぐる。依りて輪越祭とも云う。」と記載がある。

祭事で使われる獅子には天保6年(1825)銘の墨書が刻まれ、長い歴史を物語っている。赤間祇園祭では、暴れ神輿が街道沿いの家々に突っ込む姿がある。これは、この時期に一斉に各地で行われる祇園祭の様子とは異なり、この地域特有のものである。赤間

祇園祭は平成のはじめ頃までは7月14～15日に行われていたが、現在は直近の土日に行われるようになった。また、近年では時代を反映するように地域住民の交流や親睦も目的のひとつとなっている。

町内ごとに役割が決められ、毎年持ち回りで役を担う。神輿係、楽係、小道具係、御仮屋係、土俵係があり、道具の整備や注連縄づくりなど、役割ごとに準備が進められる。

1日目の祭事は午後7時30分から須賀神社の神前で御祭神を載せた御神幸行列が須賀神社を出発することから始まる。行列は神職と区長を先頭に、賽銭持ちや御獅子様などの小道具係、笛や太鼓を担当する楽係、赤間祇園神輿、最後に御供提灯が続く。お下りは、東側町裏の人家を通して辻田橋横の御旅所までの巡幸経路をとる。暴れ神輿で名高い赤間祇園神輿が巡幸経路沿いの民家の玄関に向かい「祝い



御神幸行列巡幸路

めでた」を唄い、鈴を鳴らしながら打ち込む様子は圧巻そのものである。この日、御仮屋に到着した御祭神はここで一泊される。

2日目は祭典の後、午後7時30分にお上りの御神幸行列が御仮屋を出発することから始まる。前日に続き、暴れ神輿が各家に勇壮に突っ込む度に、見物客から大きな歓声が沸き上がる。御神幸行列は途中、赤間宿内の今井神社、猿田彦神社に立ち寄り、途中数回の休憩をはさんで午後12時近くに須賀神社に到着し、拝殿に神輿を安置して赤間祇園祭は終了となる。

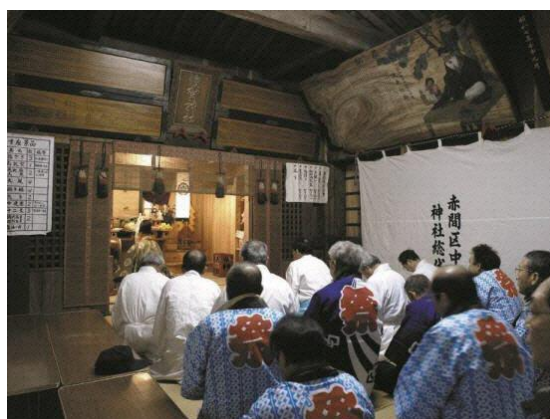
## ウ 赤間ゑびす座

恵比寿は、大漁・豊作、商売繁盛につながる日本人にとって身近な招運来福の神で、商業や交通網の発展に伴い、交通の要衝や宿場町へと全国的に広まった。明治時代以降、恵比寿祭は商店街の歳末大売出しの催し物にも発展し、昭和期には赤間宿沿いの商店街でも12月に恵比寿大売出しが行われていた。この時には、赤間の商店だけでなく博多などの商店も出店するなど、多くの買い物客で賑わい、買い手は宗像だけではなく、炭鉱で活気があった、筑豊地方からも集まっていたという。また、福引も行われ、良い景品が当たった時は鐘を鳴らして当たった人の名を赤間中に宣伝していた。

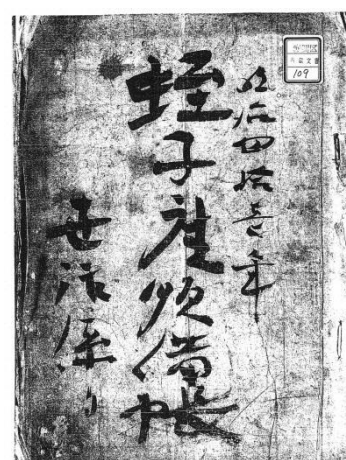
赤間ゑびす座は、商売繁盛を祈願して12月の第1日曜日に須賀神社拝殿で行われるお座である。赤間区には明治41年(1908)の『蛭子座準備帳』が残されており、50年以上の歴史がある。赤間ゑびす座は、平成のはじめ頃までは「3日えびす」として毎年12月3日に行われていた。参加希望者は事前に「座券」を購入し、当日、座を決める番号札と交換する。一番座に座ると縁起が良いとされ、神社には地域の人々が早朝から並んで開座を待つ姿がある。当日は早朝、神社関係者や代表者による祭典の後、午前5時30分から一番座が始まる。24人を一座として、午前10時の閉座までに15前後が開座される。お座では、紅白餅とスルメ、昆布が配られ、「エイッ エイッ」の掛け声で打ち込みの拍手の後、お祓いと神酒をいただく。その後、来年の運勢を福引で占うが、参加者たちはその結果に一喜一憂する。一等を当てた参加者はお託宣として恵比寿様の掛軸と御神酒をもらえる。そのほかの参加者にも縁起物の景品が配られ、空くじはない。戦時中は福引が中断されていたという。この日は地区のあちこ



ゑびす座参加者で賑わう須賀神社



神社関係者や代表者による祭典



蛭子座準備帳

ちで縁起物を片手に笑顔で家路につく人々の姿がある。また、この地区では一等を当てた参加者は、昔から家に帰って近隣の人々を招き幸運のおすそ分けをする習わしがある。

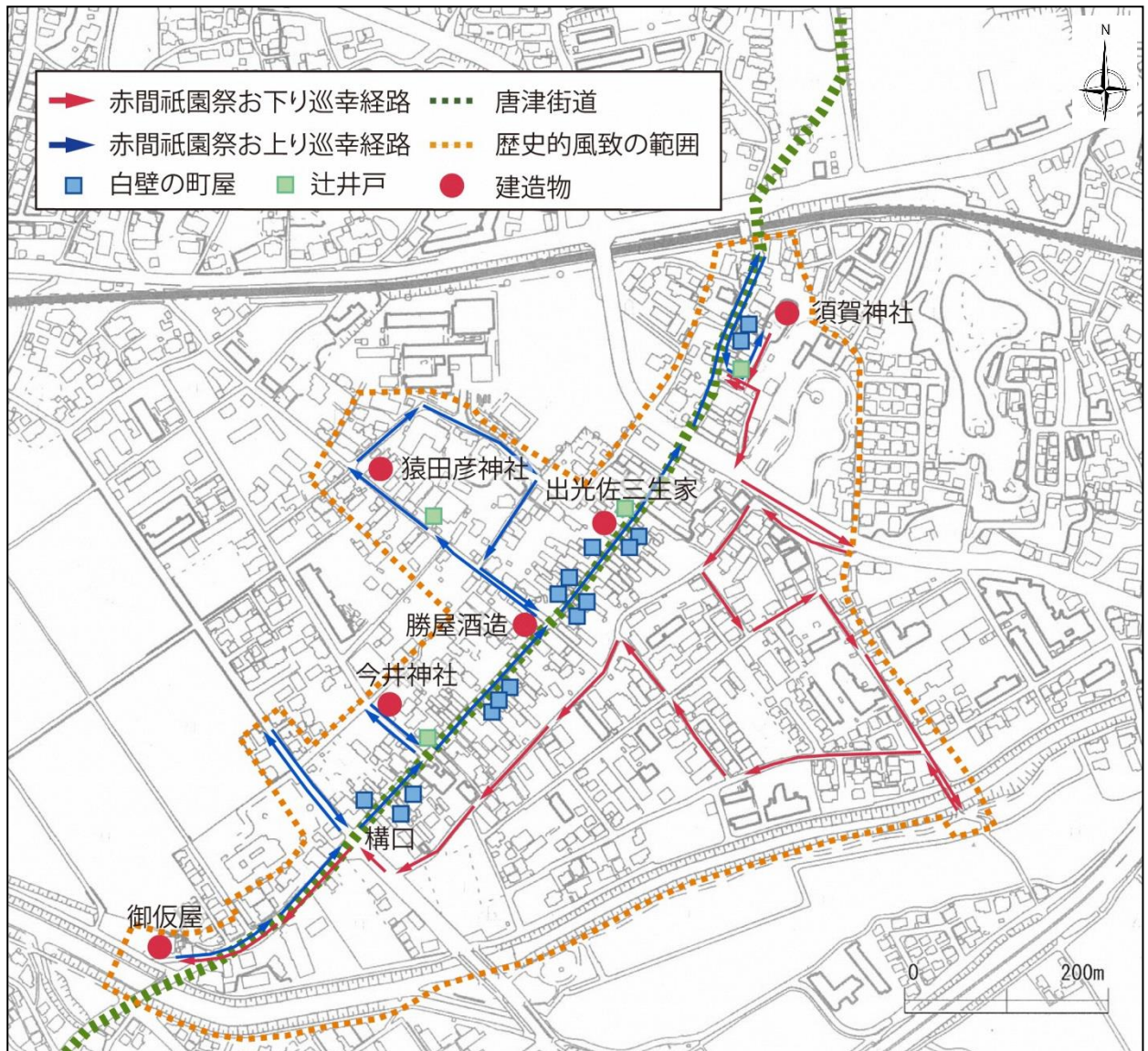
## (6) まとめ



赤間ゑびす座ではさまざまな縁起物が配られる

市東部に位置する、江戸時代に赤間宿が整備された一帯は、福岡と北九州を分ける山並みの麓にあり、沿線には辻井戸が点在し、間口が狭く奥に長い敷地に趣のある商家や町家が立ち並び、人々の信仰や活動の拠点となった社寺がある。市域の中でも歴史的建造物が集中的かつ良好に残されており、活気があった頃の息吹を感じることができる。現在、赤間宿周辺には、江戸時代に宿場町として栄えた頃の歴史が基盤となって市街地が形成されている。江戸時代には、唐津街道を人や物資、情報が幾度となく往来し、この地域は大きく発展した。明治代には市域を横断する鉄道（現鹿児島本線）が開通し、昭和50年代に街道に平行して国道3号線バイパスが開通したことで、都市圏へのアクセスの利便性が高くなり、街道沿線の市街化が進んだ。現在、唐津街道は、市民の生活道路としての役割を果たしている。

ここでは、江戸時代から続く酒造りなどの生業をはじめ、赤間祇園祭やゑびす祭をはじめとする祭事などの伝統や活動が今もなお息づいており、歴史的に価値の高い建物と人々の活動が一体となった維持向上すべき歴史的風致がある。



唐津街道赤間宿にみる歴史的風致の範囲